

41757

教科書文庫

4
810
41-1929
200030 2025

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

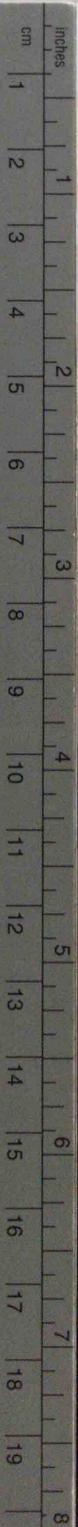


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

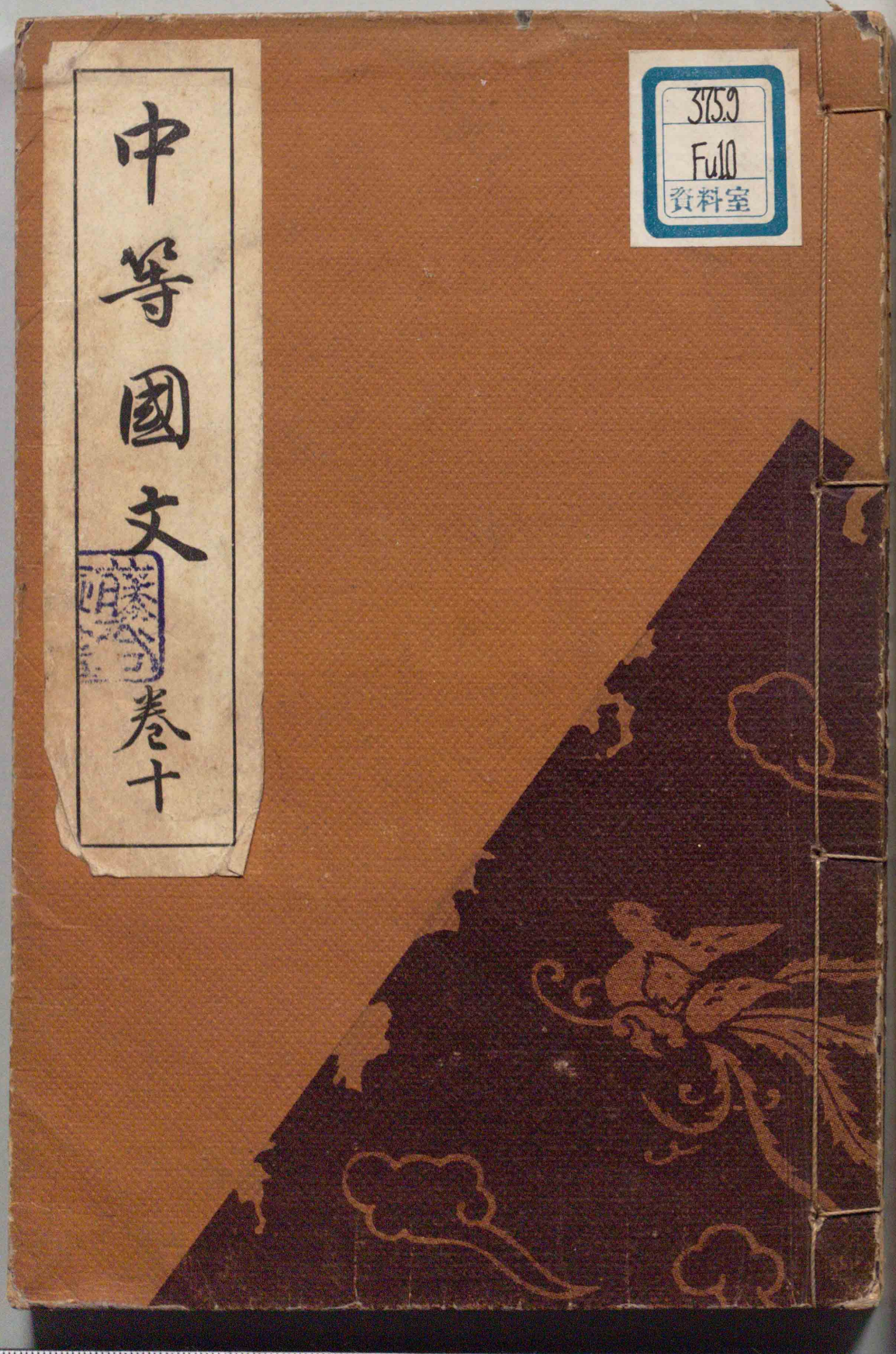
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Fu10
資料室

中等國文 卷十




日二月三年四和昭
濟定檢省部文

文學博士藤井乙男編

中等國文

東京 金港堂書藉株式会社

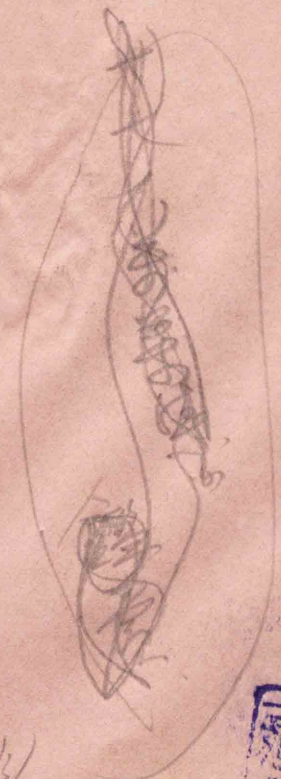


資料室

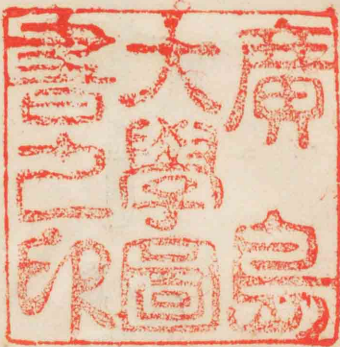
370.9
Fu10

卷九

二七
二二
193



Handwritten notes and signatures in cursive script, including the characters '藤井' (Fujii) and '乙男' (Ichio).



中等國文

卷

目次



- 一 春と秋
- 二 宇陀の松原
- 三 歌の調
- 四 香川景樹(自習文)
- 五 桂園一枝より
- 六 自覺の徹底
- 七 隱岐の小島
- 八 君のため

- 正岡子規
- 紀貫之
- 香川景樹
- 尾上柴舟
- 香川景樹
- 吉田静致
- (増鏡)
- (新葉集)

目次

- 九 世界の四聖その一
- 一〇 世界の四聖その二
- 一一 橋慢と多言
- 一二 俳句と和歌
- 一三 雪と月
- 一四 枕草紙抄
- 一五 平安朝貴族の趣味(自習文)
- 一六 律
- 一七 靜思雜記
- 一八 朗詠
- 一九 知と愛



- 高山林次郎 五
- (同) 六
- (十訓抄) 七
- (伊竹伊家取勢元物語語) 八
- 清少納言 八九
- 關根正直 九
- 上田敏 二六
- 綱島梁川 三〇
- 西田幾多郎 三三

- 二〇 合はぬ算用
- 二一 裾野の雨
- 二二 元祿の三文豪
- 二三 御代の古道
- 二四 國民思想の變遷
- 二五 今と昔
- 二六 萬葉集の長歌
- 二七 人生は戦である
- 二八 労働と人生

- 井原西鶴 二五
- 近松門左衛門 二四
- 藤岡作太郎 二五
- 中山三柳 二六
- 和辻哲郎 二七
- 綱島梁川 二八



中等國文 卷十

及 予

① 春と秋

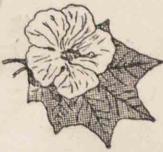


正岡子規

正岡子規
明治の俳人、
歌人、伊豫松
山の人、明治
三十五年歿、
年三十六。
胡枝
萩の漢名
敗醬
女郎花の異名
修竹
清婉

春は花木を以て勝り、秋は花卉を以て勝る。春園に紅桃・白
李の煥發するさまは、以て秋野に胡枝・敗醬の亂生する景と比
すべし。春光漸く回りにて、殘寒未だ退かず、一枝の白梅は、已に
頽籬に沿ひ、修竹に交りて、清香を放つを見る。漸くにして、紅
梅綻び、椿花咲き、李花開き、杏花笑ふ。梨花淡々の雲は、三春の
院を鎖し、桃花斑々の紅は、十里の漁村に映ず。雨を帶ぶる海
棠は、艶麗にして、月を抱く櫻花は、清婉なり。秋にありては、木

木芙蓉



臘脂

杜牧、唐の人、
樊川はその號
なり。大中六
年（一五二二）
卒す。その山
行の詩に、
「遠上三寒山、石
徑斜、白雲生
處有、人家、停
車坐愛楓林晚、
霜葉紅、於二
月花。」あり。
長々
扶疎

犀木槿は玩賞すべき花にあらず、木芙蓉の如きは、木にして草
に近きものなり。故に、予はいふ、秋に花木なしと。
一林の蜀錦、末枯の山を靚ひ、萬葉の臘脂、花なき梢を染むる
ものは、晩秋の紅葉にして、即ち、これ、杜樊川をして、紅於二月花、
と稱せしめたるものならずや。由來、紅葉は、尤も善く秋光を
代表するものと看做さる。春の花木に匹敵するものは、則ち
この紅葉に外ならざるなり。而して秋の紅葉に對すべきも
のは、春の若葉なり。裊々たる柳條、千絲東風を弄し、萬縷春雨
に煙るの光景より、枯木再び蘇して、扶疎たる新緑を現出する
に至るまで、總べて、これ、活氣充滿し、生意流動するものにあ
らざるはなし。
花草は、春に少なくして、秋に多きが如し。莖のさゝやかに

櫻草



紫苑



きんせん草



藤

咲きて、紫の色なつかしくにほへる、蓮花草の美しく開きて、春
田の畔に錦の茵をひろげたる、茅針のしをらしき、土筆のおど
けたる、皆、これ、春草の憐むべきものにはあれど、細微纖麗、いづ
れか兒女が摘草の材料にあらざる。その外、福壽草、櫻草の類、
皆盆栽的の細草ならざるはなし。秋草は、春
草に比して、枝葉稍、大なれども、その花輪は、較、
小さく、花を著くる様は、春草の如く、一莖に一
花を著くるものにあらずして、一枝頭に無数の細花を著くる
もの多し。萩尾花、敗醬、紫苑、雞頭、藤袴、金線草等、皆この類なり。
故に、秋草は、花卉全體の姿致を賞するもの多く、一花一花の形
狀を問へば、殆ど答ふる能はざるもの、十に八九なるべし。
若し、夫れ、春月と秋月とを比せんか、春月に、

大江千里の歌、
新古今集に出
づ。

よみ人しらず、
萬葉集卷十春
雜歌。

よみ人しらず、
萬葉集卷十秋
雜歌。

よみ人しらず、
古今集に出づ。

玲瓏
ち
備

照りもせず曇りもはてぬ春の夜の
朧月夜にしくものぞなき
春されば木隠多き夕月夜おぼつかなしも山陰にして
といふが如き、皆春月の朧々を形容したるものなり。秋月に
對する詩人の感情は、全くこれに異なるものありて、

白露を玉になしたる長月の在明の月夜見れど飽かぬかも
白雲にはねうちかはし飛ぶ鴈の
數さへみゆる秋の夜の月

といへるは、皆秋月の清光を吟詠せるものなり。春に霞むと
いひ朧といひ、秋に澄むといひ朗といふ。天象の上に於て、霞
靄の多少は、春秋の月華に二様の光を與ふるものなるべしと
雖も、その感情の過半は、他の關係より生ずるものの如し。即

許六
森川氏、彦根
の人、芭蕉の
門人、正徳五
年歿、六十。

ち、春といへば、暖の意を含み、随つて朦朧の感を惹起せしめ、秋
といへば、冷の意を含み、随つて玲瓏の感を惹起せしむ。而し
て朦朧は低の意を聯想せしめ、玲瓏は高の意を聯想せしむ。
漢語に、秋高といふは、秋天の高きより言ひ出せるなり。また、
吾人が日常の經驗に於て、廣く開きたる處は冷かにして、狭く
閉ぢたる處は暖かなるを知る。例へば、四疊半の茶室に在る
は、百疊敷の書院に在るよりも暖かなるが如し。

許六

大名の寢間にも寝たる夜寒かな
とは、蓋しこの意ならん。また普通の感情に於て、つやゝかに
光るものは、多く冷かに感ぜられ、よどみて曇りたるものは、多
く暖かに感ぜらる。例へば石は土よりも冷かに、鏡は櫛より
も冷かなるが如し。

歸納

般



大髭に剃刀のとぶさむさかな
 といふも、この意に外ならず。されば、吾人は、この感情を歸納して、氣暖かなる時は、千疊敷も廣しとせず、磨き立てたる鏡も自ら曇りたる感を生じ、氣冷かなる時は、八疊の間も何となく廣く、牀も柱も自ら光るが如き感を生ず。これ、即ち、春天は低く、秋天は高く、春月は曇り、秋月は晴るゝの感を生ずる所以なり。

許 六

更に、春風と秋風とを比せんか。春風は吹いて東よりし、秋風は吹いて西よりす。東は日出て夜明けそむる方なり、故に、活潑の意あり。西は日没し日暮るゝ方なり、故に、沈衰の意あり。こは、稍、客觀的に春風と秋風とを區別するものなりと雖も、普通に感ずる所のものは、概ね主觀的なる差別なり。今日

凋落

鳥兔句

紀貫之の歌、古今集に出づ。

藤原家隆の歌、新古今集に出づ。

安貴王の歌、萬葉集卷八に出づ。

藤原敏行の歌、古今集に出づ。

普通の感情に於て、春風といへば、春を代表するが如く、秋風といへば、秋を代表するが如くおぼゆるは何故ぞ。蓋し、和漢ともに、古來、風を目して、寒暖を催し生成凋落を司るものとなししに由れり。例へば、春風を詠じて、

袖ひぢてむすびし水のこほれるを

春たつけふの風やとくらん

谷川のうちいづる波も聲たてつ

うぐひすさそへ春の山風

といひ、秋風を詠じて、
 秋立ちて幾日もあらねばこの寝ぬる朝開の風は袂寒しも
 秋來ぬと目にはさやかに見えねども

風の音にぞおどろかれぬる

春の光やいともものもの
春の光は青々と

淳膏

紆餘

うわりのり

鬼貫

伊丹の人、元文三年歿、七十八。

丈草

尾張の人、蕉門十哲の一人、

といふ皆、春風・秋風を以て甚だ意あるものの如くなせり。その實、春風必ずしも暖かなるにあらず、秋風必ずしも冷かなるにあらず。多くは主觀的に暖を感じ冷を覺ゆるのみ。

春水と秋水との如き、またこれ同一の水なり。春は、即ち淳膏・紆餘、暖うして流れざるが如く、秋は、則ち清澄淨潔、寒うして底なきに似たり。故に春水は之を油に比し、秋水は之を刀劍に比す。

春の水とところどころに見ゆるかな

鬼貫

青空や手ざしもならず秋の水

丈草

春日の長きは、秋日の長きが如く、秋夜の長きは、春夜の長きが如し。然るに、春は特に日を擧げ、秋は特に夜を擧ぐ。彼の枕草子にも、

風先到寒新、人攜寄地、冷朝程、袵装
雲氣送行曙、色白江心、惜別暮、无恙
天倚南極、日色宜、近海運、亦溟、鵬翼、張
想見印、洋月明、夜把杯、連對、朗吟、長
加藤賢妹遊海外、其留別詩、玉礎
正岡常規、九拜

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎはすこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

秋は夕ぐれ。夕日はなやかにさして、山の端いと近くなりたるに、鳥のねどころへゆくとして、みつよつふたとびゆくさへあはれなり。まいて、鴈などのつらねたるが、いとちひさくみゆる、いとをかし。日いろはてて、風の音、蟲の音などいとあはれなり。

としるせり。春も陽なり、朝も陽なり、春曙は、これ、陽の陽なるもの、秋も陰なり、夕も陰なり、秋夕は、これ、陰の陰なるもの、俱に、人間の感情を起すこと、わけて高き時を指したるものなり。

子規隨筆

紀貫之

平安朝の歌人
天慶九年歿、
年六十五。

九日

承平五年正月

大港

土佐國香美郡

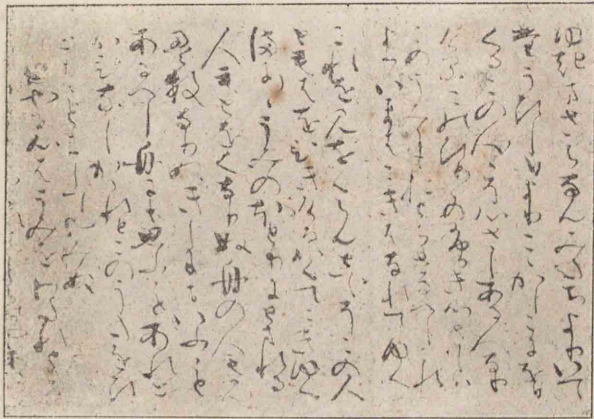
にその蹤あり

といふ。

奈半

同國安藝郡

二 宇陀の松原

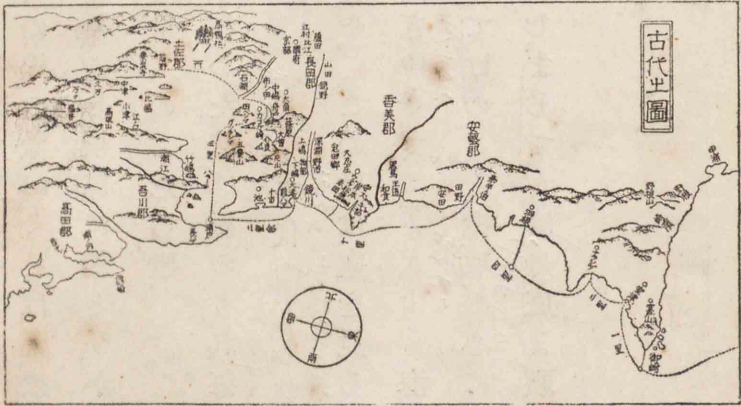


(本 田 前) 記 日 佐 土

九日、つとめて大港より奈半の
泊を追はんとて漕ぎ出でけり。
これのれ互に、國の境のすぢはと
て見送りに來る人數多が中に、藤
原言實、橋秀、衡長、谷部行政等なん
御館出で給ひし日より、こゝか
こにおひくる。この人々の深
志は、この海にも劣らざるべし。
これをり、今は漕ぎはなれて行く。
これを見送らんとてぞ、この人ど

紀 貫 之

古代土圖



※土佐國香美郡
赤岡の邊なる
べしといふ。

二 宇陀の松原

もはおひきける。かくて、漕ぎゆ
をまに、海のとりに留まる
人も遠くなりぬ。船の人を見え
ずなりぬ。岸にもいふおぢある
べし、舟にも思ふことあれど、かひ
なき。かゝれば、この歌をひとり
ごとにしてやみぬ。
おもひをる心は海濱に
ども
ぬみまなげ
しらずやあるら
あくて、宇陀の松原を過ぎ行く。

その松の數はくそば久幾千年経たりぞ知らず。もと毎に浪
うちよせ枝毎に鶴とびかふ。おもしろしと見るに堪へぞし
て、舟人のよ絶る歌、

みわた夢ば松のうれ毎にそむはるは

千代のどちぞおもぬべらなる

とや。この歌は、處を見るにえはさらず。かくあるを見つゝ

漕ぎゆくまにく、山も海も皆暮れ、夜更夢て、西東も見えずし

て、てけのこと、職取の心に任せつ。男もならはぬは、心も心

細し、まして、女は舟底より頭をつきあてて、音袂のみぞ泣く。

(土佐 日記)

べら

てけ

音を泣く

香川景樹

鳥取の人、香川景樹の養子となり香川姓をなす。天保十四年癸、七十六。

拖く
屯る

三

歌の調

香川景樹

いにしへの歌の調も情もと、のへるは、他の義あるにあら
ず、ひとへの誠實より出づればなり。誠實よりなれる歌は、や
がて、天地の調にして、空吹く風の物につきてその聲を爲すが
如く、當るものとしてその調を得ざることなし。これを雲と
水とに喩ふ。雲の在るや、たちて浪にまがひ、くだりて花を欺
き、拖きて褶となり、屯りて峰をなす。水が行くや、亂れて文を
織り、湛へて藍を染め、凝りて鏡を懸け、送りて珠を爲すが如き、
百に千に變態を盡すといへども、皆意ありてしかするにはあ
らず。たゞ、風によりてたゞよひ、地につきて下れるのみ。か
の言の葉もかくの如し。短きは短歌となり、長きは長歌とな



香川景樹

り、見るもの聞くものまにまに、その姿あらはれざること能はず。これ、やがて、情の物に觸るゝ形容なり。さるなかに、自ら調なりて、巧めるが如く、飾れるが如く、そのあやたぐふべきものなきに至るは、あめつちの中に、この誠よりまぐはしきものなく、この誠よりうるはしきものなければなり。

歌は、情のゆくまにまに、ひとり調成りて、思慮を加ふべきものならねば、いにしへに似せんとするのいとまあらんや。もしこれを似せたらんは、やがて、飾れるいつはりのみ。また、似せんとして似るべきものならんや。これを似せて似たりと

まぐはし

おもひをらんはいとあぢきなし。 後

その大御世、大御世の風體をなすものなり。また、人々の性のかはれるが如し。しか各、異なりといへども、その大御世のすがたをばのがるべからず。これをしばらく機ものにとへんに、かの性質の調を經となし、萬端の思を緯となして、天地の心のまにまに織りなすめり。時ありては、だか機におり出し、時ありては、しづ機におり出す。それ、やがて、大御世、大御世のすがたにして、あるは、味織の錦となり、あるは、荒栲の布となるも、皆、かの手に任せて、あやどるものなり。されば、わたくしに如何にと、もすべきものには、あらざるなり。さかしきにうつ

たか機
しづ機
味織
荒栲

すなはち

し上れるに似せんとすとも得べけんや。
 歌は、うたひあぐるすなはちに感ずるものなり、傾きてその
 意を悟り、尋ねてその調を識るものならんや。されば、假にも
 人をしてきゝまどはしむべきものにはあらざるなり。今の
 世の歌は、今の世の辭にして、今の世の調にあるべし。然れど
 も、そのうけ得たるしらべ、己がさまざまならん中には、おのづ
 から萬葉古今に似たらんすがた、その外くさぐさのおもかげ
 いかでかは出で來ざらん。さて、なほ、今の大御世の調の外
 に出づること能はざれば、そも、また萬葉古今の古風にあらず
 して、實は、今の御世の風體なるものなり。歌は、おのが情を
 まげて、古調に似せんとするばかりたくみの甚だしきはあら
 ざるべし。

(新學異見)

尾上柴舟

名は八郎、文學博士。東京女子高等師範學校教授

薩埵峠 駿河國庵原郡にある。

四 香川景樹 (自習文)

尾上柴舟



尾上八郎

冬の夜は明け渡つて、朝日は駿河灣の波の上を暖かに照らし初めた。薩埵峠の東の方から、西へ越えようとする旅人の群があらはれた。一人は師匠で、他の三人は、その弟子と見える。その後に従つてゐるのは、荷持の男である。師匠と見える男は、背が高く、瘠方で、長顔で、色はやや白くつて、神經質らしく思はれる。をり／＼三人を振り返つて、緩々と話をするが、語はあまり明瞭でない。話は歌の事であるらしい。

倉澤
薩埵山の古道
の坂口。

「まだ出来ないか、むづかしく考へんで、調のまゝに云へばいい。
『さやかにも現はれそめし富士の嶺に、さし向ひたる朝づく日
かな』まあ、こんな具合なものだよ。」
歩みは進んで、一群は峠の上になつた。
「どうだ、こゝを下りて見ないか。昔の關所のあとがあるだらう。
きつと磯傳ひに道もあるに相違ない。」
弟子が答へようとする、荷持が、
「旦那、惜しい事をした。前の倉澤から下りれば下りられたのだ。
こゝは嶮しくつて、とても行かれませぬ。」
「どうしても下りられないか。」
「いや、無理をすれば下りられんといふ事もないが、名高い親不知だ、
そこもこのごろ波が打ち込んですつかり崩れたといふ事だ。とて
も傳つても行かれはせん。」

孝一
石田孝一

「そんならよしてもいいが、下りんといふのも惜しい事だ。往つて
見ようではないか。」
弟子達は顔を見あはせたが、云ひ出しては聞かない師匠の氣象を
知つてゐるので、一人が、
「それでは御供を致しませう。が三人皆下りては荷物に困ります
から、一人誰か荷持と一緒に先へまゐつて御待ち致しませう。」
「それでは、さういふ事にしてくれ。孝一、御前は荷持と先へ行つて
くれ。」
孝一は難を遁れたといふ風で、一寸一禮して、荷持と二人で行つて
しまふ。それを見送つて残つた弟子が情なさうな顔つきをしたが、
思ひ切つたといふ様子で、
「さあ、参りませう。」
「落ちない用心をしる。」

「氣速な師匠は、すでに小松と萱の中に進んでゐた。小松も多い、萱も多い、道といふものは跡方もない。直ぐに三人の體は、自然に滑つて落ちるやうに、下へ下へとさがつて行く。さがるに従つて、茨も交つて來た。手に障り、顔に障ると、鋭い針がちく／＼としながら過ぎて通る。痛い／＼と思ふが拒ぐ事も出來ない。見る／＼、手も顔も甚しくひつかかれて、血も流れて來た。歸らうとしても、足のかげどころもない。が富士はまともによく見える。」

岩木山
薩埵山の古名。

岩木山まとへるかづらとりすがり、苦しき目にもかゝる富士の嶺。
「誰か出來たか。」

師匠は流石である。が答へるものもない。その中に、師匠も足が滑つた。あつと思つて、引つ摺んでやつと止まつた。それは、一握の草であつた。何かと思つて見ると、藤袴である。

藤袴誰れぬぎすて、下りけむ、我のみと思ふ山のとかけに

と思つたが、これは云はなかつた。

草と木といよ／＼絡んで來た。針の木が叢生してゐるのに、あらゆる葛が這ひかゝつてゐる。押分けて下ると、鹿が胸分をみると同様である。弟子の一人は、遂に刀を抜いて、葛や楚しよとを切拂ひ初めた。が、刀の光の、きら／＼と見えたのも暫くで、すぐに草に隠れてしまつた。目當がなくなつたので、どう下つていいか分らない。

「あうい。」

下の方や、横の方で「あうい。」が、姿は見えない。その下の方を目がけて滑りながら下りると、距離がよほど隔つたものと見えて、何人の音も聞えない。また、

「あうい。」

今度は何の答もない。どうしたらう。進みすぎて滑り落ちたか、落ちたら波にさらはれるであらう。どうしたものかと、師匠も、少し

く怖氣立つて來た。が、とまる譯にも行かない。と下から、

「あんまり峻しくつてもう行かない。」

聲が波の音に交つて聞える。落ちなかつたと安心はしたが、師匠は例の負け惜しみで、

「飛び下りられないか。」

「とても駄目です。下までは一二丈もあります。刀をさしたまゝでは大怪我をします。」

残念だがしかたがない。

磯ぎはに、下り立ちかねて、白波の、かへるぞ田子のうらみなりける。恨みだが、歸らうとふりかへつたが、今度は上るのが厄介だ。草鞋の底もすつかり破れた。足の裏にさゝるものがあるが、かんで取る事も出来ない。また葛と楚とを押し分け、潜り抜けて這ふやうにしてやつと少し上ると、今度は少し高いところに出られた。

「あうい、こゝへ來い。」

弟子の二人は、聞きつけて、無理やりに掻分けて寄つて來た。見ると、血と汗と一緒に流してゐる。

「ひどい目に逢つたなあ。荷持の云ふ事を聞けばよかつた。」

とうくしをれて、師匠は云つた。と弟子の一人は、

「おや、變だぞ。」

懐を探し始めた。

「何かなくなつたのか。」

「大變な事をしました。先生の御作をすつかり書いて置いた手帳を落してしまひました。」

「どの邊に落したのか。」

「どこだか、こゝでは見當もつきません。」

「もう、一遍這入つて見ませうか。」

「とても駄目だ。あきらめるがよからう。」

「残念ですなあ。随分前からのをみんな書いて置いたのですのに、惜しきかな山べに海によみためし數も白玉誰かひろはむ。』」

「さういふうまい歌が出来ればいいではないか。」

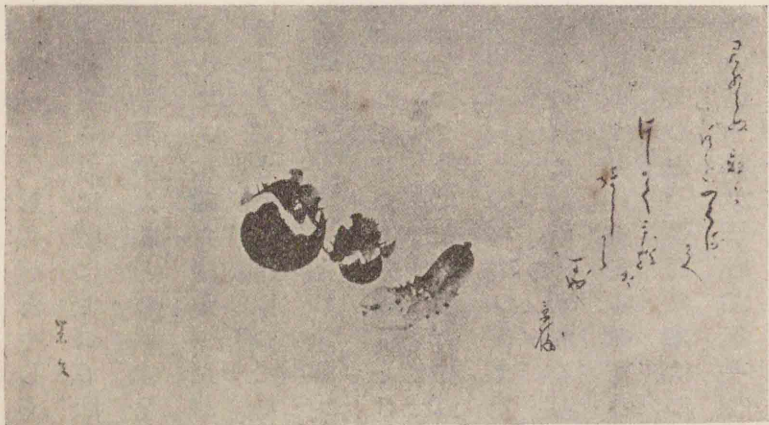
師匠は云つたが、残念さうな顔もした。自分の此の頃の歌は、いゝらか覺えては居る。が、年とともに記憶が薄くなつたので、大方は忘れた。その男の丹念な手控があるから、それでいいと頼りにしてゐたのに、こまつた事だ。あゝまた詠み直しか。

「さあ、行かう。」

師匠は先に立つた。

二

この師匠は香川景樹である。二人の弟子は、菅名節、波多野親民、



香川景樹筆蹟

先に行つたのは、石田孝一である。時は文政元年の冬で、景樹は五十一歳であつた。

景樹は、生國の因幡の鳥取から、早く京都に出た。途中で急な瀬を越して、

幾うき瀬、渡らむ末の危さも、かけてぞしのぶ今日の川波。

などと云つたが、それが豫言となつて、京都は、景樹には、住みいゝところではなかつた。生活も出来かねるほどになつた。が、する業もないので、按摩をして町を廻つた。

梅月堂宣阿
香川宣阿、享
保二〇年歿、
年九〇。
景柄
香川景柄。文
政四年歿、年
七十七。

夕べく、しらべあやしく吹く笛の、あな哀れとも聞く人のなき。
景樹の志は歌によつて世に立つ事であつた。故郷で、師匠の清水
貞固も驚いたほどの歌才を持つてゐた。その故に、窮乏の中にも、恃
むところは甚だ強かつた。この困厄が故郷に聞えた。舊友の一人
は、「そんなところに困つて居るより、此方へ歸つて来い、どうにでもす
る。」

と云つて來た。景樹は、その禮を云ひながら、
侘びて世にふる屋の軒の繩すだれ、

朽ちはつるまでかゝるべしやは。

とその次に書いた。が、この志は遂に報いられる時が來た。

景樹は、梅月堂宣阿の後の景柄を師としてゐた。この人は養子を
求めてゐた。景樹の才は、この人の感心するところとなつた。梅月
堂の號を辱かしめざるものはこの男であらうと、景柄は思つた。で、

妙法院の宮
眞仁法親王、
文政二年歿、
年三十八。
小澤蘆庵
京都の歌人、
享和七年歿、
年七十九。
伴蒿蹊
文章家、歌人、
武者小路實岳
の弟子、文化
三年歿、七十四。
澄月
武者小路實岳
の弟子、寛政
十年歿、年八
十五。
慈延
吐屑庵慈延、
冷泉爲村の門
人、文化二年
歿、年五十八。

話はずん／＼進んで、景樹は遂に景柄の養子となつた。これは三十
一歳頃であつた。景樹は、これで先づ生活の安定を得た。

景樹はこれから天稟の才を盛んに發揚した。多くの光ある歌は、
世を動かした。妙法院の宮からも、月々の御會に歌を召された。門
人もおひ／＼出來た。「この人の出たのは、道のために祝すべきだ。」
といふ人もあつた。「この位の作をする人は、またとあるまい。」と云
ふ語もきこえた。

勢に乗じた新進の意氣は、いつも盛んなものである。景樹は、無意
識に大言することもある。負けじ魂から、他を排撃する事もあつ
た。爲に同情のあると同時に、攻撃の火の手もあがつた。

當時京都では、歌の大家として、小澤蘆庵、伴蒿蹊があり、また澄月慈
延などもあつた。これらの門流も、皆相應に廣がつてゐた。

近いところにも、かやうな人々が居るとともに、遠い江戸には、村田

村田春海 加茂眞淵門、
江戸の人、文
化八年歿、年
六十六。
加藤千蔭 枝直の子、眞
淵門、文化五
年歿、年七十
四。
覬覦 うかどひねら
ふ。
客氣 血氣にまかせ
た一時の元氣。
反噬 恩義ある人に
はむかふ事、
恩を仇でかへ
すこと。

春海・加藤千蔭を主として、その門流が夥しくあつて、いはゆる縣居門



村田春海 村田春海が
あつた。これら
の間に景樹は
立つたのである。
ことに才氣と
客氣とを多分に
持つてゐたので、
反噬

と報復とは、それと反比例して非常なものであつた。

「都にて我のみひとり歌よむとて誇りかに云ひ罵るをこのよめるなり。まだしき心には、いかばかりの歌よみとも思ひ分かねば善悪定めて見せたまへ」と云つて景樹の歌を江戸に通知したものがあつた。それを受けたものが千蔭と春海とであつた。千蔭は温厚らしいが、元來江戸つ子である。春海は人の悪口は鰻の蒲焼よりも旨

瑕瑾 ます、短所。

八田知紀 香川景樹の門
人、薩摩の藩
士、明治六年
歿、年七十五。
小川布淑 蘆庵門、蘆庵
して津流とい
ふ。文政三年
歿、六十五。
村田春門 本居宣長門、
天保七年歿、
年七十二。

いといふ人である。この歌に對して見ると、一般的の種々の瑕瑾が目に著いたと同時に、流派的憎惡が盛んに湧いた。それで忌憚のない散々な批評をした。

この批評を見て、佐々木眞足がその評をした。後に景樹の門に入つた八田知紀もまた詞を加へた。蘆庵の門人の小川布淑も、伴蒿蹊も、村田春門も口を出した。布淑はまた雅俗辯といふものを書いた。蒿蹊は續雅俗辯といふのを書いた。甲論乙駁喧々囂々の體で、景樹の歌は一世の耳目をあつめた形となつた。

この中に景樹は養父の景柄と意見の衝突を來した。景柄は舊習を墨守する家風を承けた爲、景樹の傳統破壊的の行動は容れらるべくもない。遂に景樹は、

たらちねの親の教に違ふともまことにむかふ敷島の道。
と云ふ意氣で、離縁して貰ふこととなつた。が香川の姓は依然とし

て名乗つて前から仕へた徳大寺家にも相變らず出入した。また既に従六位下、長門介になつてゐたが、次いで従六位上にも上り、更に従五位下となり、肥後介にも移つた。この方面では、もとの大困厄は、すつかり夢となつた。

しかし、空位空官は、實際生活には多くの寄與をしなかつた。經濟の巧みでない景樹は、時には人の扶助を受けねばならず、また厭な事もせねばならなかつた。

言の葉も、わたらひ草にまじりけり、あなくちをしの宿のけしきや。は、自から口を衝いて出た語であつた。

四圍の狀況がよくないと、景樹の反抗心は却つて強くなつた。元來自分の歌を批難した千蔭春海の師の賀茂真淵の意見に對して、手強い反對をした小澤蘆庵の主義は、景樹の共鳴するところであつた。これを基礎として、更に自己の創見をも加へて、景樹はさびしく縣門

一流を攻撃した。

真淵は、古語古意に因つて歌を作つた。真淵はそれらを楷梯として、上代に遡り、儒佛の道の渡來しない前の時代の精神を體得しようとした。乃ち、その時代に居た純正日本人の精神を知悉しようとした。更に云へば、この道を明らめようとした。この故に、真淵では、古の道の探求が主であつて、作歌はこの手段に過ぎないのであつた。

蘆庵は、それを歌の本義から攻撃した。今いふ古語はその當時の俗語である。従つて、今いふ俗語は、後の世の古語である。歌は人の眞情を吐露するものである。それには、今の語が一番適切である。吾吾は、今の語を使つて、今の歌をよむべきであると主張した。

景樹も蘆庵と同じく、今の語、今の意を強張した。真淵が「萬葉集を常に見よ。且つ我が歌もそれに似ばやと思ひて、年月よむほどに、其の調も心も、心にしみぬべし」と云つたのを、景樹は「こはゆゆしき妄論

新學
一卷、歌學の
書、明和二年
成る。

新學異見
一卷、歌論の
書、文化八年
成る。

なり。歌は情のゆくまに、獨り調べなりて思慮を加ふべきもの
ならねば、古へに擬似んとするの違あらんや。」と駁し、また眞淵が「萬
葉は……今模としまねばんには、よきを取るべし。……之をよく取
れるは、鎌倉の大 臣(實朝)なり。その歌どもを多く見て思へ。」と云
つたのを、景樹は「歌はおのが思ひを盡すの外なければ、何を模とし、何
を學ばん。また鎌倉の右府の歌は、志氣ある人、たえて見るべきもの
にあらず。況んや、之に倣ふべけんや。」と難じた。すべて眞淵の云
つた事に強い攻撃を加へた。眞淵の「新學」に對する景樹の「新學異見」
は語氣も辭句も極めて烈しいものであつた。

景樹は更に調を説き出した。歌は理を云ふものではない。調ぶ
べきものである。心に虚偽があれば調に虚偽がある。反對に心に
眞實があれば調に眞實がある。同じ語でも、調で意味が違ふ。語も
大事であるが、調は一層大事である。歌はこれに依據すべきである

と云つた。蘆庵よりもこれは一步を進めてゐる。

この議論を、景樹は自分の歌の上に、どのくらゐ實行したか、それは
別として、以上の言説は、四邊を動かすべく十分であつた。縣門一流
の人々の嫉と怒を強めた。

三

以上の説を持して、敵の根據地の江戸下りを景樹は企てた。そこ
に幾分でも地域を占領して、千蔭春海等を驚かさうとした。當時江
戸は、大體縣門で滿されてゐたが、景樹の一派も少しく存在した。僧
の亞元(あゑん)兒山(こやま)紀成(のりなり)などがそれであつた。景樹はそれらを頼つて、文政
二年二月に遂に江戸に下ることにした。

景樹の壯心は、門流の人々の意氣を旺にした。
武藏野のはてのはてまで、敷島の道ひらくべき時は來にけり。

兒山紀成
景樹の門人、
伊勢の人、天
保十一年歿、
年六十四。

木下幸文
景樹の門人、
備中の入、文
政四年歿、年
四十三

目白臺
目白驛より護
國寺畔に到る
まで約三十丁
東西に連互し、
江戸川を前に、
雑司ヶ谷を後
にしてゐる。

藜莽
草木の盛に生
え茂ること。

と木下幸文がいつたのは、追従の語ではなかつた。しかしこの旅行は好結果を齎さなかつた。彼は、反対派の攻撃をまともに受けねばならなかつた。刺客さへも、旅宿に忍び込んだとも傳へられた。亞元等も疎々しくなつてしまふ様な事も出来た。敵を破るよりも、先づ自らの破れが生じた。

失望落膽の中に、景樹は遂に京に歸ることとなつた。急に用が出来て、尾張の津島まで歸ると云つて、江戸を出發した。時は十月二十三日であつた。目白臺の愛松軒を出る時、

立ちいづるわが袖だにも知らぬかな、心の中に落つる涙は。
と云つたのは、どのくらゐ口惜しかつた事であらう。

相模の海岸を過ぎて、箱根を越し、駿河路にかゝつて、沼津、原、吉原を通つて、十一月十二日の朝、薩埵峠にかゝつた。關の跡を見ようと思つて、藜莽の中に入つた。そこで思はず門人が歌の手帳を遺失した

のであつた。

今までの短くない經歷を、景樹は他人の事でも考へるやうに考へて見ると、頗る興味があるが、自分の事だ、しかも現在の身上の事だと思ふと、手帳の遺失も、不祥な豫言のやうである。自分は、今、たゞ小さい火を、少ない油に支へて、果もない暗黒の洞穴へ進んでゐるのではなからうか。今まで負けじ魂を極度に發揮して、四邊を悉く敵にした態度は、或は誤つた處世法ではなかつたであらうか。口惜しいやうな、悲しいやうな、嘗て經驗しなかつた心持が、ちく／＼と湧いて來るのが、しみ／＼と感じられる。

『孝一が待ちくたびれてゐよう。さあ行かう。』

景樹は、その陰慘な心持を追掃ふべく、聲を強めて、再び弟子を促した。

不祥な
不吉な。縁
起のわるい。

江戸から京都に歸つた景樹は、相變らず窮乏であつたが、その中に妻さへもなくなつた。しかし、門人は増加して、この一流の歌は一世の規範となつた。その説を聞いて、耳もとに大鐘をつくやうに感じた人もあつた。が、病弱であつた彼は、天保十四年三月二十七日に、七十六才で歿した。その遺著が種々ある中で、家集の桂園一枝、桂園一枝拾遺は、歌に志すものの必讀の書となつた。門人の八田知紀、その門人の高崎正風が、明治になつて、御歌所長に任ぜられてから、景樹の歌風は宮中に入り、従つて天下に廣まり、一時は桂園派の歌でなくては歌でないやうにさへ云はれ、景樹の死後の聲譽は極めて高く、徳川末期の歌人の巨擘として今日にまで及んでゐる。

高崎正風

陸奥の人、八

田知紀の弟子

明治四十五年

薨、年七十七、

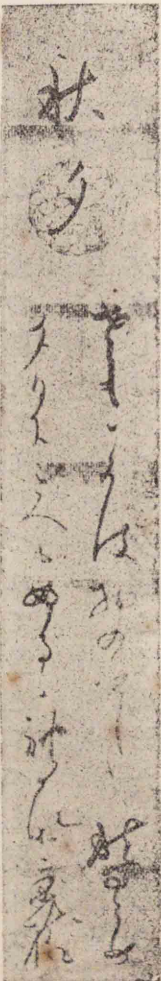
正二位勳一等

巨擘

大立物。

五 桂園一枝より

香川景樹



香川景樹筆蹟

夏 雲

大空のみどりになびく白雲のまがはぬ夏となりけるかな

月照流水

ゆく水の末はさやかにあらはれて川上くらき月のかげかな

風前時雨

浮雲はかげもとゞめぬ大空の風にのこりてふる時雨
かな

雲

しぐるゝはみぞれなるらしこの夕松の葉しろくなり
にけるかな
野の宮の櫳の下みちけふくれば古葉とともにちる櫻
かな
夜半の風麥の穂だちに音づれて螢とぶべく夜はなり
にけり
近わたり夕立しけむこの夕雲ふく風のたゞならぬか
な
月てればつらく椿その葉さへみな白玉と見ゆる夜

楡の榎
日の暮れ

半かな
朝づく日さしも定めぬ大比叡のきらゝの坂に時雨ふ
る見ゆ
むさし野のはての玉山たまゝに向ふ高根のめづら
しきかな
子はなくてあるがやすしと思ひけりありての後にな
きが悲しき
題しらず
柚人の筏につくりさしおろすひのくれ行けば戀しき
ものを
題しらず
ともしびのかげにて見ると思ふ間に書よのうへ白く夜

はあけにけり

白河の紅葉を見にまかりし時

蝗とぶ浅茅が下をゆく水の音おもしろしこゝに暮さ

む

黒木うるかたに

召せやめせ夕げのつま木はやく召せ歸るさ遠し大原

の里

春 蟲

大空にたはるゝ蝶の一つがひ目にもとまらずなりに

けるかな

採早苗

暮るゝまで田子の諸聲きこゆなりけふ植ゑはつる早

苗なるらむ

水邊秋夕

鳴のゐる澤邊の水はすみにけり草かげ見ゆる秋の夕

ぐれ

冬 聲

ころもでの田上川の上つ瀬に網代うちわたす音のさ

やけさ

おくて田のさはだを刈ると今朝見れば穂浪かたかけ

薄氷せり

(以上桂園一枝拾遺)

田上川
近江國栗太郡

吉田靜致
文學博士、倫
理學者、東京
帝國大學教授。
精神生活

六 自覺の徹底

吉田靜致

吾等は、眞の現代と皮相の現代とを區別しなければならぬ。



吉田靜致

精神生活の必須の要求に基いて出て來りたる新運動は、眞の現代の特色をなして居るものである。ところが、かかる要求からでなく、唯變化を好むといふやうな極淺薄なる理由に依つて起る新運動がある。人間は、變化を好む者である。しかし、その變化に對する淺薄なる要求より生じたる新運動の如きは、決して現代を作らない。眞の現代を作る

仁者無敵
靜致

吉田靜致筆蹟

ものは、吾々の心の奥底にあるところの精神生活の要求から生じたる新運動でなければならぬ。而して、かゝる新運動即ち眞の現代のためにするものは、偽の現代の皮相的のものより明確に區別せられねばならぬ。眞の現代は、偽の現代に勇敢に反對して、これをうち滅さずんば決して

發展させることは出來ない。即ち、眞の現代を實現せんと欲するならば、偽の現代を征服することに依つて、始めてその目的を達し得るものなることを覺悟しなければならぬ。その

我

物質的にのみ趨る傾向を打破して、精神生活といふものに注意を向け、眞の現代を造り出さなければならぬ。これ即ち、自覺の徹底を叫ぶ所以である。如何なる場合にあつても、吾は精神生活を基として、本當の我を發揮しなければならぬ。かくて、一たびその本當の我といふ事におもひ到れば、茲に人間の尊嚴なることを認めざるを得ない、人格の偉大なることを認めざるを得ない。

私は、今日の日本の思想の狀態に就いて、三つの大なる缺陷を認めるのである。それは何であるかと云ふと第一は人間の尊嚴と云ふ事を餘り考へて居らぬといふことである。第二は、自發的態度に乏しいと云ふことである。唯、外からかうするものだといはれて、その眞意義の何たるを知らず、盲目的

敬虔の念

第一我

に動いて居るといふのは宜しくない。須らく自ら進んで自發的態度に立たなければならぬ。一方に於ては人間の尊嚴といふ感じが尠く、さうして、それに關聯して、自發の念が乏しいのである。第三には、敬虔の念に缺くる所があるといふことである。事を行ふに當つては、唯、利害にのみ拘つて實行してはならぬ。我の中に看出さるゝところの第一我より現れてくる最高の意味に於ける良心の命令を衷心より重んじて、之を實行するといふ態度に立たなければならぬ。しかも、とにかくに利害に依つてのみ事を行ふ者が多いのであつて、これは、皆、敬虔の念に乏しい結果である。人間の尊嚴とか、自發の態度とか、或は敬虔の念とかいふことは、私の考ふるところでは、徹底せる自覺から當然生じて來

衝動

ることと思ふのである。第一我を自覺するに至らんか、我の極めて尊嚴なる所以を知ることが出来る。決して我を物慾の奴隸とすることは出来ない。肉體的衝動の奴隸とすることは出来ない。その他種々の關係に於て、人間の尊嚴といふものが現はれて來れば、道德上偉大なる力となるのである。さうして、第一我の衷心の要求に基いて、種々の事を実行し、他より當て箴められた規則に依つて、嫌々ながら動くといふやうなことでなく、我自ら進んで善を実行すると云ふ自發の態度は、實に、それから生じて來る。

國民道德

同じく國民道德を実行するに當つても、これは當然國民として進んで實行すべきものであるといふやうに、自發の態度に立つて之を行ふにあらざれば、生命ある道德といふことは

出來ない。外部よりの規則に依つて行つたといふだけでは、如何にその事が美しい形であつても、眞の生命ある道德はそれより生じない。やはり第一我たるところの我の本質その物の要求よりして、自ら之を求めて來るといふ自發の態度に立つて、始めて眞の道德が成り立つのである。これに依つて、敬虔の念といふものも自然に生じて來るのである。唯、外の形式に囚はれて動くのではない。第一我たる精神の命ずるところ、國家社會と一體たる眞我の命ずるところに對する敬虔の念が根柢となつて居るに非ずんば、到底眞の道德となることは出來ないのである。さういふ事は、皆徹底せる自覺よりして生ずるのである。

(道德の根本義)

七 隱岐の小島

てん
かつは
護摩

隱岐の小島には、月日経るまゝに、いと忍び難う思さるゝことのみぞ數そひける。いかばかりのおこたりにてかゝるうき目を見るらんと、前の世のみつらくおぼし知らるゝにも、いかでその事をも報いてんとおぼして、うちたえて御精進にて、朝夕つとめ行はせたまふ。法のしるしをもこゝろみがてらと、かつはおぼすなるべし。自ら護摩などもたかせたまふに、いとたのもしきこと、夢にも多くなんありける。
正成は、金剛山ちはやといふ所に、いかめしき城をこしらへて、えもいはずたけきものども、多くこもりゐたり。大塔宮は、熊野にもおはしましけるが、大峯をつたひて、しのびしのび、吉

さりぬべきく
まぐま

野にも高野にもおはしましかよひつゝ、さりぬべきくまぐまには、よく紛れものしたまひて、たけき御有様をのみあらはしたまへば、いとかしこき大將軍にていますべしとて、付き隨ひきこゆるもの、いと多くなり行きければ、六波羅にもあづまにも、いと安からぬことともてさわぎて、なほかのちはやをせめくづすべしといへば、つはものなどのぼりかさなると聞ゆ。

※元弘三年

※年もかへりぬ。都にも、なほ世の中しづまりかねたるさま

御垣守

に聞ゆれば、隱岐にては、よろづに思し慰めて、關守のうちぬるひまをのみ窺ひたまふに、然るべき時のいたれるにや、御垣守にさぶらふつはものどもも、御氣色をほの心えて、靡きつかうまつらんと、思ふ心つきにければ、さるべき限りかたらひ合せて、後の二月の二十四日のあけぼのに、いみじくたばかりて、か

かくろふ

ゐて奉る



人々心ちしづめける。

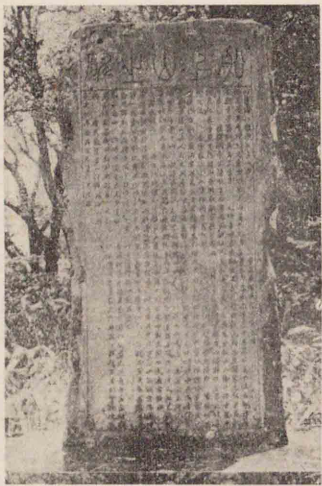
後 醒 翻 天 皇

くろへてゐて奉る。いとあやしげなる蟹の釣船のさまに見せて、あけやらぬ空の暗きまぎれにおし出す。
をりしも、霧いみじう降りてゆく先も見えず。いかさまならんと危けれど、御心をしづめて念じたまふに、思ふ方の風さへ吹きすゝみて、その日の申の時に、出雲國につかせたまひぬ。こゝにてぞ

類ひろし

むねむねし

※伯耆國東伯郡
赤崎の南三里



船上山の碑

同じ二十五日、伯耆國稻津浦といふ所へうつらせたまへり。

この國に、奈和の又太郎長年といひて、あやしき民なれど、いと猛に富めるが、類ひろく心もさかしく、むねむねしきものあり。彼がもとへ宣旨を遣したまひたるに、いとかたじけなしと思ひて、とりあへず、五百餘騎の勢にて御迎へにまゐれり。またの日、加茂の社といふ所にたち入らせ給ふ。都の御社おぼしいでられて、いとたのもし。それより、船上寺といふ所へおはしまさせて、九重の宮になずらふ。

増 鏡

八 君のため (新葉集より)

武藏國へうちこえて小手指原といふところにお
りゐて手分などし侍りし時いさみあるべきよし
つはものどもにいひふくめ侍りし序におもひつ
づけ侍りし

宗良親王
後醍醐天皇の
皇子。

宗良親王

君のゆめ世のさめ何るをしう履登

すまてかひゆるみのちなりさげ

住吉の社の歌合に

同

もちあらぬをやほし茶をまきとるとも

ふ不あらましの末はせほぎ登

元弘元年北長尾の山莊に籠り居侍りけるを世の
みだれによりてかしこをもまた立ち出でて後よ
み侍りける

※山城國葛野郡
に在り。
山莊は妙光寺。

藤原師賢

花山帝、後醍
醐帝に仕へた
る忠臣。

藤原師賢

おむむろ絲入りよし山杖多ちいでて

まよふ言た世も多々君此と絶

下總國に侍りける頃神無月の末つかた病おもく
なりて今はかぎりとおぼえけるに思ひつゞけ侍
りける

同

死出の山去えむも知らで都人

なほ侍里ともとま程や待りらむ

題しらず

源 頼 武

源頼武
四位、新葉集
の歌人。

ひねりめし心のまゝふ梓ゆ美

おもひかゝるさび年も經にま里

高山林次郎

評論家、樗牛
と號す。文學
博士、明治三
十五年歿、年
三十二。

九

世界の四聖 その一

高山林次郎

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる、聖人に
あらずんば、誰かこれを能くせんや。釋迦、孔子、ソクラテス、基
督の四人、世呼んで世界の四聖と稱す、宜なるかな。

釋迦は、西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に
生る。父は淨飯王、母は摩耶夫人、釋迦は伽毘羅王家の族名に
して、本名は悉多、佛陀といふは、その出家成道後の尊號なり。
釋迦、身は一國の太子に生れけれども、夙に思を人世の問題に
潛め、二十九の歳、その妻子を捨てて、王城を逃れ、山林に隠れて、
道を修むること六年、終に人世の奥義を極め、無上の正覺に徹
底せり。爾來五十餘年の間、中天竺の各地に巡錫して教化を

正覺
巡錫

名目の優劣
元元
歸命
木鐸

布き、年八十四歳にして跋提河の邊に没しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し、釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど、徒らに思索の高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談理と慘憺たる苦行とによりて、安心の道を求めたり。その流派を樹てて相争ふ所は、畢竟名目の優劣のみ。未だ一世の元元をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生れ、その浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て、一世の木鐸となり、民をしてよく歸依する所を知らしめたり。

孔子、名は丘、孔子はその尊稱なり。今を去ること二千一、百餘年の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて夙に令聞

陵夷



孔子

あり。魯の定公の時に至り、擢てられて大司寇の職に就く。治績大いに舉り、内外その風采を想望す。時に、齊王、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子、時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方の遊説を試みぬ。

當時の支那は、所謂春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は、臣にしてその君を弑するものあり、或は、子にしてその親を害する者あり。強は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の

名教 蹉跎

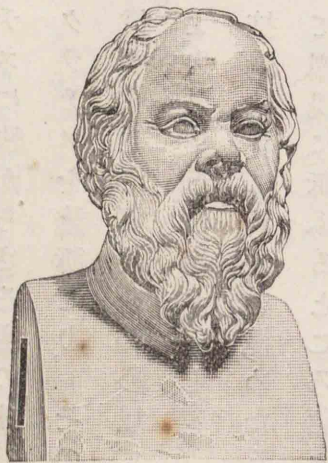
下學 天

如きはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出て、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻らさんとす。志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして、四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず、世また耳を名教に傾くる者なし。ここに於て、已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、「嗚呼吾が道遂に窮す。世遂に吾を知るものなきか」と。門弟子貢慰めて曰く、「何ぞ夫子を知るもの無からんや。」孔子答へて曰く、「天を怨みず、人を尤めず、下學して上達す。吾を知るものは、それ天か。君子は、歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや」と。後幾くもなくして歿す。時に年七十三。

ソクラテスは、希臘の雅典府に住める一彫刻師の子なり。

詭辯學派

諄々



ステラクソ

その生れたるは、凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦孔子と年を隔つる事二三十年に過ぎず。東西の聖人、殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりといふべし。希臘の當時は、所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に止り、道徳は空文の上のみ貴ばれたり。その状、猶釋迦當時の印度の如く、學問は、人生社會の實際に關して、殆ど裨益する所なかりき。ソクラテスは、慨然として、時弊の救済を以て自ら任じ、盛に道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば、則ち、その獨得の論法を以て辯難攻撃

假借
侃諤

して、一步も假借せず。侃諤の正義、その稀代の雄辯と相伴な
ひて一世を風靡せり。

然るに、喬木は風に折らるといふ喩に漏れず、群小のソクラ
テスに快からざるもの相計りて、國法に背けるものとしてソ
クラテスを讒訴せり。その訴狀に曰く、ソクラテスは、國教を
信ぜずして異教を勸め、以て人心を惑亂せり。宜しく國法に
よりにて死刑に處すべし」と。ソクラテスがこの讒訴に對する
抗議は、實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以
て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然
れども、判官はソクラテスを以て傲慢不遜なりとなし、死刑を
宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、曰く、「命のみ」と。

ソクラテスの獄中にあるや、常に門弟子を集めて、生死、靈魂

※醫藥の神

未來の事を説き、人の脱獄を勸むるものに對しては、輒ち答へ
て曰く、「予は唯正義に導かれんのみ。死、また、何するものぞ。
人世の幸福は靈魂の上にあるを知らずや。」と、終に従容として
毒を仰いで歿す。將に歿せんとするや、弟子、遺言を求む。ソ
クラテス曰く、「爾一鶏を以てアスクレピアスの神に捧げよ。」と。
蓋し、曾て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしが爲
ならん。希臘の聖人ソクラテスは、かくの如くにして逝きぬ。
年七十。

基督は、本名を耶蘇といふ。基督とは、膏灌がれたる者」とい
ふ義にして、教徒の奉れる尊稱なり。猶太のベツレヘムに生
る。その生後四年を以て、西曆紀元第一年となす。父をヨセ
フと呼び、賤しき木匠なりき。母の名をマリヤといふ。長じ

福音

て三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間、猶太の各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずしてその福音を傳へたり。

收斂

抑、當時は羅馬帝國の榮華、正にその極に達し、禍亂の萌芽その中に胚胎し、災異荐りに至りて、天下寧日無し。殊に、基督の故國なる猶太は、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は、徒らに珍奇の淫祠を崇拜して、益、放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄し、形式に拘泥して、空しく人を惑はすのみ。是に於て、一世の人心は、悉く、偉人の現出して、この暗黒の社會を照破せんことを渴望せり。基督、この間に生れ、自ら救世の使命を負へる神の子と稱し、昂然としてその偉大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然として之に赴く。僧侶、學者、官吏等は

照破

之を喜ばず、猥りに新法異説を唱へて民を迷はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處す。基督、豫めこの事あらんを慮り、晏然として騒がず、靜かに祈りて曰く、神よ、彼等を許せ。彼等はその爲すべき所を知らざればなり」と。その刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、エルサレムの女子よ、吾が爲に哭くこと勿れ。唯、おのれとおのれの子との爲に哭け」と。此の如くして、基督は三十三年の短命を以て、十字架上の露と消え去りぬ。基督の死後、その弟子等は、激烈なる迫害に抵抗して、その教を天下に弘む。基督教、即ち是なり。

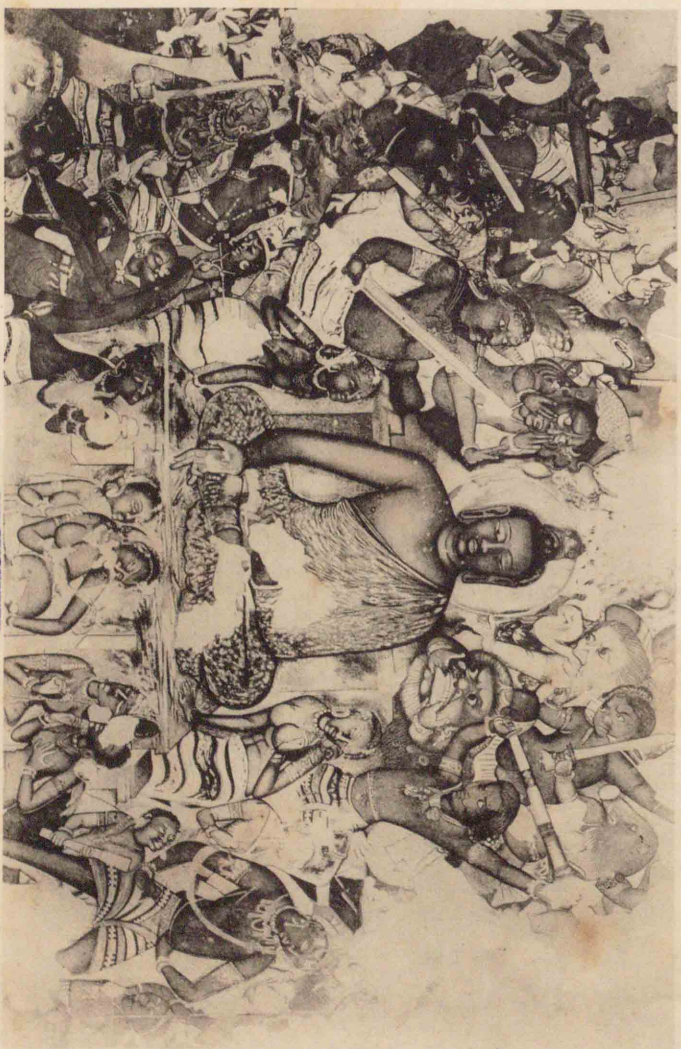
(舊牛全集)

一〇 世界の四聖 その二

高山林次郎

軼軻

あゝ、四聖の人物・事蹟の高大にして雄偉なるは、永く後人の景慕し崇拝すべき所なり。四聖の中、釋迦を除きては、いづれも軼軻不遇の中にその生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、經綸を抱いて、空しく咏嘆の間に歿せり。ソクラテスと基督とは、いづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に磔殺せられたり、慘憺たりと謂ふべし。然れども、是等の人々の志す所は、天下後世に在り、現世の禍福と一身の安危とは、毫もその顧慮する所にあらず。故に、その死に就くや、晏然としてなほ歸するが如し。孔子は、その身の不幸を憂へずして、却つて、吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世



釋 迦



(印度アセンダー壁畫)

煩惱
涅槃

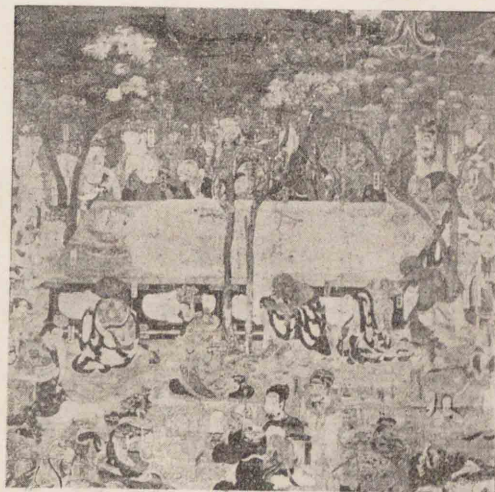
に見えん。」と嗟嘆せり。釋迦は衆生の爲に、その妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテスは、死罪の脅迫に遇うて、揚言して曰く、正義を信ずるものにとりて、死はた何するものぞ。われをして一日の生あらしめんか、その一日、乃ち國民の迷をさまさざるべからず。」と。基督は、己を罪に陥るゝもののために神に祈りたり。嗚呼、何ぞその慈悲の浩大にして無邊なるや。

四聖は、その生れたる處と時とを異にす。故に、その教理にも亦多少の相違なきを得ず。今、その要略を擧ぐれば、左の如し。

釋迦の教理は、煩惱を斷滅して、涅槃に達するを主旨とす。それ、人生は苦に始まりて苦に終る。生老病死、孰れか苦にあ

故に吾人は

我



文樂の圖

らざるべき。故に、吾人は現在を苦界と觀ぜざるべからず。而して、苦の原因は、情慾に在り、情慾の原因は、我の一念に執着するに在り。故に、吾人は、我の一念を脱却して、無我無念の境界に達せざるべからず。これ、人生究竟の樂地にして、涅槃、即ち是なり。

孔子の教は、身を修め、家を齊へ、天下を治むるに在り。而して、身を修むる基は孝に在り。故に、孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆これに基づく。人は、生れながらにして、

後天
氣質

美德を天に稟くれども、後天の氣質によりて、之を完うすること能はざるもの多し。教育の要、ここに於てかあり。既に、教育を受けて、身既に修らば、家おのづから齊ふべく、家齊はば國おのづから治るべく、國治らば天下おのづから太平なるを得べし。故に、孔子の教は、一身の修養に始まり、治國平天下に終るものと見るを得べし。

ソクラテスの教は、所謂智徳合一説なり。思へらく、眞正の知識は即ち道徳なり。故に、行ふと知るとは、もと一體のみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、共に知識道徳の眞正なるものに非ず。眞理を確信し、その實行を以て最上の義務となせば、正義おのづからその中に在り。正義は、靈魂の満足なり。而して、靈魂は、肉體と異にして、不朽不滅

なるものなり。故に、人の正義を行ふ、現世の利害は決して顧慮すべきにあらず。道德は、富貴のために存せず。然れども、富貴は道德の中に在り。」と。

心貧し



めらるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふものは福なる

所謂山上の垂訓は、三年傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げん。曰く、心の貧しきものは福なるかな、天國はその人の有なればなり。哀しむものは福なるかな、その人は慰

500
502

窄き門

かな、その人は飽くことを得べければなり。憐むものは福なるかな、その人は憐を得べければなり。心の清きものは福なるかな、その人は神を見るべければなり。惡に敵すること勿れ。人若し汝の右の頬を打たば、左の頬をも轉じて之に向けよ。汝の隣人を慈しみ、汝の敵を愛せよ。人に見せんがために、義をその前に行ふこと勿れ。右の手に爲す所を、左の手に知らしむること勿れ。偽善者の行に倣ふこと勿れ。隠れたるを鑑み給ふ神は、顯に報い給ふべければなり。人は、神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非すること勿れ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざるや。汝等求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然らば遇はん。叩け、然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に至る門はその路

大きく、之に入るものは多し。嗚呼、いかに生命に至る門は窄く、その路は細く之を得るものの少きぞや。凡そ、この訓を聽きて行ふ者は、磐の上に家を建てたる智者の如く、聽けども行はざる者は、沙上に屋を架せる愚人の如し」と。基督教の精髓は、後世の人如何なる色彩を加ふるとも、畢竟この山上の垂訓を出でず。

かくの如きは、四聖の傳記及び教義の大要なり。嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ。而して、この教の今なほ凛々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りてその道念を養ひ、その安慰を求む。四聖の如きは、實に、人類の永遠の救濟者なりと謂ふべし。その遺徳の高大なること、夫れ、何を以てか之に比せんや。

（釋牛全集）

橋慢と多言

涯分

ある人はいはく、人の世にあるならひ、橋慢を先として、よく穩便なるは少し。或は、自由自在の方にて穩かなげらば、これは、わが涯分を料らず、見せしもなき身を高くおもひあげて、主をも輕しめ、傍輩をもさぐるなり。或は、偏執かんてつの方にてかたくななり。これは、わが思ひたることをいみじうして、人のいふことを用ひざるなり。或は、世にかはれる振舞あり。これは、昔をのみいみじと思ひて、今の世にしたがはぬなり。或は、折節せつせつに似ぬをこあり。これは、内々よくなれにしかばと思ひて、はれに出でて人をならし、もしは、うちとけ遊ぶ所に交りて、われは未だ

思ふべき

直衣の紐をわらわんて

しらかす

たらふ

1
2
しらかす
たらふ

亂れぬまゝに、ことうるはしう紐さしかためて人をしらかし、その座をさますなり。或は、才能についてそしりあり。これは、物を知り才のあつきによりて、よろづの人をあなづるなり。或は、愛著についておろかなり。これは、わが主より外はめでたき人なし、わが妻子ばかりみめこゝろたらひたるものあらじなど思ふなり。或は、すきについて笑はるゝあり。これは、昔の人はことに心もすきて、花月をも徒らに過さざりけり。今は時代改まりておもしろき事もさる程にて、それにのみしみかへりてはなど、心一つをやりて人めにあまる難あり。或は、振舞についてくせあり、これは、起居のありさまの目だたく、をこがましきなり。

おほかた、かやうのことは、橋慢をもととして、心の小さきよ

しのぶ

願作心師、不
レ師於心(涅槃經)

り起れり。これによりて、つひに生涯をうしなひ後悔を深うす。かゝれば、たとひ身をよしと安んじ、昔をいみじとしのび、物をおもしろしと思ふとも、人目をはかり世のそしりをつつしみて、心に心をまかすまじきなり。されば、ある經には、心の師とはなるとも、心を師とせざれ」と説かれたりとかや。凡そ、貧しき者の諂はざるはあれども、富める者の驕らざるはかたければ、皆人の習なれども、身のいたりて徳の重からんにつけても、よくしづまりて穩かなるおもひをさきとすべし。

(十訓抄)

二

ある人いはいく、人をあなづることは、しなかはれども必ずあることなり。或は、貧しく賤しきをもあなづり、或は不覺なる

むつる

をもあなづり、或は、われよりさがれるをもあなづりて、するこ
 とをいふこともさばかりにこそと思へり。或は、親しみむ
 つる、をあなづり、おほかた、不運なるものをば、行ふ所のこと
 がらよからぬやうに思ひ、いやしきものは、ふるまひとふるま
 ふこと、いたづらごとと思へり。これは、無智の人のあること
 なり。これによりて、いふまじき言をいひ、すまじき業をも
 するまふほどに、あなづるからに、だはぶれして、想はざる外の
 恥がましきことにもあひ、厭はるまじき者にも厭はれぬれば、
 人に軽く思ひけたれ、心劣りせらるゝなり。 (同 上)

三

ある人はいはく、人は慮なくいふまじきことを口とく言ひ出
 し、人の短きを誹り、したることを難じ、かくすことを顯はし、は

ゑみの中の劔

ぢがましきことをたゞす、これ等は、すべて、あるまじきわざな
 り。われは何となくいひちらして、おもひもいれぬ程に、いは
 るゝ人は思ひつめて、いきどほり深くなりぬれば、はからざる
 に恥をも與へられ、身のはつるほどの大事にも及ぶなり。ゑ
 みの中の劔は、さらでも恐るべきものぞかし。又、よくも心得
 ぬことをあしざまに難じつれば、かへりて、身の不覺あらはる
 るものなり。おほかた、口輕きものになりぬれば、某にそのこ
 となきかせそ、かの者にな見せそ、などいひて、人に心をおかれ
 へだてらるゝ、口をしかるべし。また、人のつゝむことのおの
 づからもれ聞えたるにつきても、疑はれんは面目なかるべし。
 しかれば、かたがた、人のうへをつゝしみ、多言を止むべきなり。

(同 上)

宗因

西山氏、談林派の頭目、天和二年歿す、七十八。

大隈言道

福岡の人、徳川末期の歌人、明治元年歿、七十一。

貞室

安原貞室、松永貞徳の門人、寛文十一年歿、六十四。

清水濱臣

江戸の國學者、醫を業とし名を玄長といふ、村田春海の門人、文政七年歿、四十九。

よきところ

一二 俳句と和歌

白露や無分別なるおきどお詠

宗因

所夢を草の上葉の端居して

大隈言道

ほろびも落ちぬ露は白玉

これはくとはばかり花乃吉野山

貞室

みと志野のよし野の山の花ざらゑ

清水濱臣

暫しものこそははれざりなむ

夏草やつはものぞもが夢の跡

芭蕉

武士の草むすかば祿年ぬりて

加藤美樹

秋風さむし桔梗が原

あかくと日をつれなくも秋の風

芭蕉

よほのむい推の本もも
あつと立

芭蕉筆蹟

小澤蘆庵

尾張の人、歌人、享和元年歿、七十九。

加藤美樹

賀茂真淵の門人、宇萬伎とも書く。安永六年歿、五十七。
*信濃國東筑摩郡。

影よわき夕日も峯よ入りはてて

薄霧なびく秋風の山

小澤蘆庵

上田秋成

小説家、歌人
通稱東作、後
餘齋と改む、
無腸、鶴居等
の號あり。
大阪の人、文
化六年歿、七
十六。

鹿なごら山影門に入日かな

蕪村
上田秋成

聲のミかひとり月見る窓の前に

尾上の鹿比影ぞちくる

江渺々釣の絲ふく秋乃風

蕪村

述懐
後の世に残さ
ん名こそかた
からめかくて
はやまじ數な
らずとも濱臣

木枯
清の筆
清水濱臣

蹟筆臣濱水清

釣の絲に吹夕風の末見にて

清水濱臣

荷兮

名古屋の人、
蕪門十哲の一
人。

入日淋し泡秋の川づ經

木枯に二日此月の吹き散るら

荷兮
香川景樹

お平やかな木の間に見ゆは三日月を

散るぞかりなる木枯の風

子規

正岡子規、伊
豫松山の人
明治三十五年
歿、年三十六。
源頼政
源三位入道と
稱す。

摘み残は薺は花にあらはきぬ

子規
源頼政

深山木のその梢とを見えざりし

櫻の花よあらはれよ春り

一三 雪と月

小野の雪

昔、惟喬の親王と申す皇子おはしましけり。山崎のあなた
 水無瀬といふところに宮ありけり。年毎の櫻の花盛には、そ
 の宮へなんおはしましける。右馬頭なりける人を、常に率て
 おはしましけり。かの右馬頭、懇ろにまうでつかうまつりけ
 るを、皇子思ひの外に御髪おろさせたまひて、小野といふ處に
 すみたまひけり。睦月にをがみ奉らんとて詣でけるに、比叡
 の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室に詣でて拜みたて
 まつるに、つれづれといと物がなしうておはしましければ、や
 や久しく侍ひて、いにしへの事などおもひ出でて聞えさせけ

惟喬親王

文徳天皇第一
の皇子、寛平
九年（一五五
七）薨す。

右馬頭

在原業平を指
す。

小野

山城國愛宕郡。

高し

納言

てしがな

や

り、さても侍ひてしがなと思へども、公事どもありければ得
 侍らば、夕暮にかへるとて、
 忘れては夢かとぞおもふおもひきや
 雪ふみわけて君を見んとは
 とてなんなくなく來にける。
 (伊勢物語による)

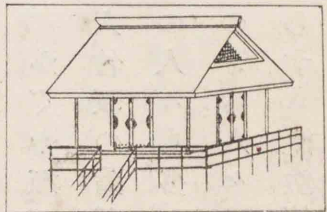
月のをとめ

かぐや姫、天に昇るべきもちの日、六衛のつかさ合せて二千
 人、竹取の翁が家にまかる。築地の上に千人、屋の上に千人、家
 の人々も多かりけるに合せて、あける隙もなくうち守る。こ
 の守る人々、弓矢を帯して居り。母屋の内には、女どもして守
 らす。姫、塗籠の内にかぐや姫を抱きて居り。翁も、塗籠の戸
 をさして戸口に居り。

六衛

塗籠

逆髪



翁のいふ「かばかり守る所に、天の人にも負けんや。」といひて、
 屋の上に居る人々にいはく「つゆも物そらに
 塗 かけらば、ふと射殺したまへ。」守る人々のいは
 く「かばかりして守るところに、蝙蝠一つだに
 籠 あらば射殺してん。」といふ。翁これを聞きて
 たのもしがりて居りけり。

これを聞きて、かぐや姫は「さしこめて守り闘ふべきたくみ
 をしたりとも、あの國の人とは得た、かはぬなり。弓矢して
 射られじ。かくさしこめてありとも、彼の國の人々は皆あけ
 なん。闘はんとするも、彼の國の人來なば、たけき心つかふ人
 もよもあらじ。」翁のいふやう、御迎へに來ん人をば、長き爪して
 眼をつかみつぶさん、逆髪をとりてかなぐり落さん。」とはらだ

まごなし



かぐや姫昇天の圖

ち居り。かぐや姫いはく、
 「聲高になのたまひそ。屋
 の上に居る人どもの聞く
 に、いとまごなし。親たち
 のかへりみを聊かだにつ
 かうまつらで、まからん道
 もやすくもあるまじ。さ
 る處へまからんとするも、
 うれしく侍らず。老い衰
 へたまへる様を見奉らざ
 らんこそこひしからめ。」と
 いひて泣く。

ねんず

たゞしれにし
る

羅蓋

かゝる程に、宵うち過ぎて、子の時ばかりに、家のあたり晝の
あかさにも過ぎて、ひかり望月のあかさを十あはせたるばか
りにて、人の毛の穴さへ見ゆるほどなり。大空より、人雲に乗
りて、おり來て、つちより五尺ばかりあがりたる程に立ちつら
ねたり。これを見て、内外なる人の心ども、物におそはるゝや
うにて、相鬪はん心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓矢
を取らんとすれども、手に力もなくなりて、心さかしき者ねん
じて射んとすれども、それさへ外さまへゆきければ、いづれも
鬪はで、心地たゞしれにされてまもりあへり。

立てる人どもは、装束の清らなること物にも似ず。飛ぶ車一
つ具したり。羅蓋さしたり。その中に王と思しき人、翁にま
うでこといふに、たけく思ひつる翁も、物に酔ひたる心地して

ここ



うつぶしにふせり。いはく、かぐや姫は、罪をつくりたまへり
ければ、かく賤しきおのれがもとに暫しおはしつるなり。罪
の限り果てぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き嘆く、あたはぬ事な
り、はや返し奉れ。」といふ。「ここにおはするかぐや姫は、重き病
をしたまへば、え出でおはしますまじ。」と申せ
羅ば、その返事はなくて、屋の上に飛ぶ車をよせ
蓋て、いざ、かぐや姫きたなき處にいかで久しく
おはせん。」といふ。たてこめたる所の戸すな
はちたゞ明きに明きぬ。格子なども、人はなくして明きぬ。
姫抱きて居たるかぐや姫、外に出でぬ。え止むまじければ、唯
さし仰ぎて泣き居り。

竹取心惑ひて泣き伏せる處によりて、かぐや姫いふ、ここに

ね
伏せれば

も、心にもあらでかくまかるに、昇らんをだに見送りたまへ。」といへども、何しに悲しきに見送り奉らん、われを如何にせよとて、捨てては昇りたまふぞ。具して率ておはしね。」と泣きて伏せれば、「ふみを書き置きてまからん、こひしからん折々、取り出でて見たまへ。」とて、うち泣きて書く。天人の中に持たせたる箱あり、天の羽衣入れり。またあるは、不死の藥入れり。ひとりの天人いふ、壺なる御藥奉れ。きたなき所のものきこしめしたれば、御心地悪しからんものぞ。」とて、もてよりたれば、聊か嘗めたまひて、「少しかたみに。」とて、脱ぎ置く衣に包まんとすれば、天人包ませず、御衣を取り出でて著せんとす。その時に、かぐや姫、暫し待て。」といひて、衣著つる人は、心ことになるなり。もの一ついひ置くべき事ありけり。」といひて、いみじく徐かに

頭中將

おほやけに御ふみ奉り、壺の藥添へて頭中將にたまはず。中將に、天人取りて傳ふ。中將取りつれば、ふと天の羽衣うち著せ奉りつれば、翁をいとほしかなしと思しつることも失せぬ。この衣著つる人は、物おもひなくなり、にければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して昂りぬ。翁、姫、血の涙を流して惑へどかひなし。

(竹取物語による)

月夜 (自習文)

千家元麿

千家元麿
明治二十一年
東京市に生る。
白樺派の詩人。

冬夜の超然とした天空杳かに
生き／＼と煌めく星と

瀧津瀬のやうな甘美な月光よ あゝ燦爛とした夜だ

黙りかへつて神秘的な星が

月光の洪水の中を まるで光が歩くやうに濶歩してゐる

聖なる人
釋迦をさす。

おゝ白き聖なる星は歩む
 夜もすがら私は月光と共に祈り
 月光と黙想し楽しんでゐる
 私から離れてゐた靈なる存在 愛と光の眩い幻像よ
 私は月光の中にキリストの幻を見たり
 虎や蛇と共に洞穴の奥に
 祈りと斷食に
 身は瘦せ眼は凹んでゐる聖なる人を思ふ
 おゝ月光の神祕よ
 隠れてゐた靈なる存在を
 起して歩む星の白さよ
 何といふ甘美の夜
 何といふ燦爛たる夜

(昭和詩選)

清少納言
清原元輔の女、
一條天皇の中
宮定子に仕ふ。

一四 枕草子抄

清少納言

尼そぎ
殿上わらは
さうぞく
うつくしむ
らうたし

瓜に書きたるちごの顔。雀の子のねずなきするにをどり
 くる。二つ三つばかりなるちごの、急ぎて這ひくる道に、いと
 ちひさき塵のありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげな
 るおよびにとらへて、大人などに見せたるいとうつくし。か
 しらは尼そぎなるちごの、目に髪のおほへるを搔きは遣らで、
 うちかたぶきて物など見たるもいとうつくし。おほきには
 あらぬ殿上わらはの、さうぞくをきたてられてありくもうつくし。
 をかしげなるちごを、あからさまに抱きてあそばしうつくし
 む程、かいつきて寝たるいとらうたし。雛の調度。蓮のうき

二藍

葉のいとちひさきを池より取りあげたる。葵のいとちひさき。何もくちひさき物は、みなうつくし。いみじうしろく肥えたるちごの二つばかりなるが、二藍のうす物など、衣きぬなにて、たすきゆひたるがはひ出でたるも、又短きが袖がちなる着て歩くも、みなうつくし。八つ九つ十ばかりのをのこごの、聲はをさなげにて文よみたるも、いとうつくし。鶏の雛の足高に、白うをかしげに、衣きぬみじかなるさまして、ひよくとかしがましう鳴きて、人のしりさきにたちてありくもをかし。また親のもとにつれだちてはしるもみなうつくし。かりの子かりのこるりの壺。

二 にくきもの

急ぐことあるをりに長ごとするまらうど、あなづらはしき

えんす

人ならば、のちになど言ひても追ひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人いとにくし。
硯すずりに髪かみの入りて磨こられたる、又墨すみの中に石いしこもりてきしきしときしみたる。

物羨ものうらやまみし、身の上歎なげき、人の上言うわごとひ、つゆばかりのこともゆかしがり聞かまほしがりて、言ことば知らせぬをば、えんじ誇うぶり、また僅わずかかに聞渡きかることをば、我もとより知りたることのやうにこと人に語るもいとにくし。

物聞ものきかんと思おもふ程に泣なくちご。鳥とりの集りて飛びちがひ鳴きたる。ねぶたしと思おもひて臥ふしたるに、蚊かみの細聲こゝろに名のりて、顔かほのもとに飛びありく、羽風はるかぜさへ身みの程ほどにあるこそいとにくけれ。さしめく車くるまに乗りてありくもの、耳みみもきかぬにやあら

んといとにくし。

物語などするに、さし出でて、我一人さかしがる者、すべてさしては、わらはも大人もいとにくし。昔物語などするに、我が知りたりけるは、ふと出でて言ひくたしなどする、いとにくし。あからさまに來たる子ども、わらはべをらうたがりて、をかしきものなど取らするに、馴れて、常に來て居入りて、調度など打ちちらしぬる、にくし。

三 (蓬の香)

五月ばかり山里にありく、いみじくをかし。澤水もげに、只いと青く見えわたるに、うへはつれなく、草生ひ茂りたるを、ながながとたゞさまに行けば、下はえならざりける水の深うはあらねど、人の歩むにつけて、とばしりあげたる、いとをかし。

つれなし

言ひくたす
らうたがる

左右にある垣の枝などのかゝりて、車の屋形に入るを、急ぎてとらへて折らむと思ふに、ふとはづれて過ぎぬるもくちをし。蓬の車に押しひしがれたるが、輪のまひたちたるに、近うかへたる香もいとをかし。

四 雲は

白き。紫。黒き雲あはれなり。風吹くをりの天雲。明け離るゝ程の黒き雲の、やうく、白くなり行くもいとをかし。月のいとあかき面に薄き雲、いとあはれなり。

五 風は

嵐。木枯。三月ばかりの夕暮に緩く吹きたる花風、いとあはれなり。曉、格子妻戸など押開けたるに、嵐のさと吹渡りて顔にしみたるこそいみじうをかしけれ。九月晦、十月朔の程

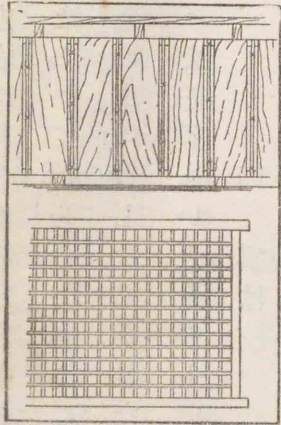
椋の葉



立部
透垣

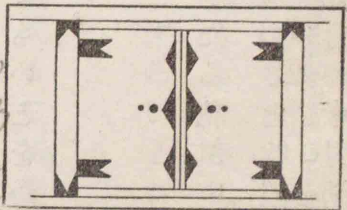
の空打曇りたるに、風のいたう吹くに、黄なる木の葉どものほろく〜とこぼれ落つる、いとあはれなり。櫻の葉、椋の葉などこそ落つれ。十月ばかりに木立多かる處の庭はいとめでたし。

野分の又の日こそいみじう哀れに覺ゆれ。
立部透垣などの伏しなみたるに、前栽ども心苦しげなり。



上下
透立
垣部

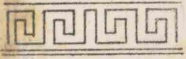
大きなる木ども倒れ、枝なども吹折られたるだに惜しきに、萩、女郎花などの上に、よろほひ這伏せるいと思はずなり。格子のつぼなどに、ざと際を殊更に



戸妻

らもん

らもん



Portrait of a man with a mustache, likely the author or a related figure.

したらんやうに、こま〜と吹入れたるこそ、荒かりつる風のしわざとも覺えね。

六 (人のこゝち)

長月ばかり、夜一夜降りあかしたる雨の、けさは止みて朝日の花やかにさしたるに、前栽の菊の露こぼるゝばかり濡れかかりたるもいとをかし。すいがいらもんなどの上にかいたる蜘蛛の巢のこぼれ残りて、ところ〜に絲も絶えさまに雨のかゝりたるが、白き玉を貫きたるさまなるこそ、いみじうあはれにをかしけれ。少し日たけぬれば、萩などのいと重げなりつるが、露の落つるに枝の打動きて、人も手ふれぬに、ふとかみざまへあがりたる、いみじういとをかしといひたる、こと人のこゝちにはつゆをかしからじと思ふこそ又をかしけれ。

(枕草子)

關根正直
文學博士、東京の人、多年東京女子高等師範學校教授たりき。

一五 平安朝貴族の趣味（自習文） 關根正直

平安朝といつても、爰ではおもに醍醐・村上兩帝の御世頃から白河鳥羽兩院の頃までの間をいふので、此の間の貴族男女の美術思想、風雅趣味に富んで居た事は、實に高度に達して居た。其の有様即ち彼等が平生の生活や、事に臨んで發現した心緒舉動、意匠に巧みで風雅の趣味に富んでゐた事と、當時の記録に徴して大略話さう。

一 詩歌に音樂

當時の士女で、先づ第一に詩歌を解せぬ者は、殆どなかつたといつてもよい。最も詩は白氏文集と、當時代の先輩學匠の作ぐらゐで、而も一般の女子に涉つてではない。寧ろ少數の範圍に限つてであるが、歌は全般に涉つてゐた。日常の挨拶同様に、他人から歌をよみかけられたら、必ず返歌をした。之をせぬのは相手に對して不興であ

白氏文集
七十一卷、唐の白居易撰す。居易、字は樂天、大中元年卒す。年七十五。

る。否失禮になるから、巧拙に拘らず早速返歌をした。これが出來ぬ場合には、側に居る者が代作代辯をしてやつた例もある。日常の談話のうちにも、古歌の詞で應答をした。例へば一條帝の中宮の所へ、兄の伊周内大臣が、雪の日に訪問した。すると中宮の詞に、道もなしと思ふたに、よくこそと會釋すれば、伊周公は、

「あはれともや御覽ずると存じてと挨拶した。是は中宮が

山里は雪ふりつみて道もなし。

けふこむ人をあはれとは見む（拾遺集）

といふ歌の詞で、勞うたから、公は直ぐに悟つて、矢張同じ歌の下の句の詞で、あはれともや云々といつた。あなたが私を、道もない雪中に來た、あゝ感心と御覽なさらうと思つてと、當意即妙に挨拶したのである。此の類はまだ幾らもある。凡そ當時の士女で、歌道に暗くは、上流の交際は出來ぬ有様であつた。

郢曲
普通には、曲節を附けた謠ひ物の總稱。

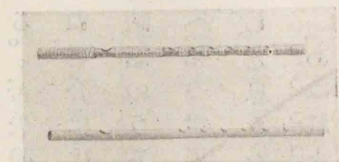
蓮胤法師
鴨長明

次は音楽であるが、是が又交際上の要件で、男女とも殆ど音楽の嗜みのない者はない。詩會、歌會のやうな文學の會のあとですら、管絃合奏の催を行ふ事は常例であつた。まして、花月の宴會、雨雪の徒然には、必ず樂器を弄んで、朗詠、郢曲に歡樂を極める、而もそれが他から



笙

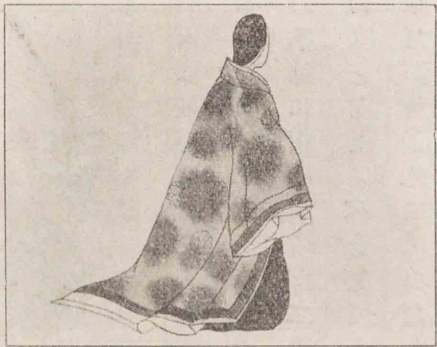
藝人を呼寄せるのではない。主客男女各自に、或は琵琶、或は笛、笙、思ひく／＼に堪能な藝を演ず



横笛

るので、熱心家は常に樂器を携へて居た。ちよつと北山へ行く御供にも、例の篳篥ひちりきふく隨身、笙のふえ持たせたるすきものは源氏物語若紫の巻に見え、横笛懷にした摺士しんし等は枕草子にもあり、腰なるえうでう（腰笛）ぬき出して、嵯峨野の月に「ちつと鳴らいた」仲國は、平家物語の中にも居る。世捨人の蓮胤法師すら、折琴繼琵琶は何處へ行くにも持つていつた。

二 服装の意匠



服装は、當時の士女の最も意匠を凝らした所で、他人の衣紋えもんにも頗る趣味を持つて居た。衣服の原料たる織り様、染め様、紋がら、模様もようの發達し

浮てゐた事は、蓋し意想外であつたらし紋い。随つて織紋模様、染色に尤も注意のして、四季の時節に適應する様にしたが、就中表著うらばの色ばかりでない、裏の色や上下の重ねの配合に心を盡した。

一條帝の中宮が、或年の二月十日に、父母と妹に對面するといつて、晴の衣裳をした時、紅梅色の固紋かたもんと浮紋うきもんとの重ねうらば桂の下に、紅の打衣うちぎを三枚重ねて、搔取かきとりのやうに打掛けて著ながら、清少納言にむかつて、



打衣

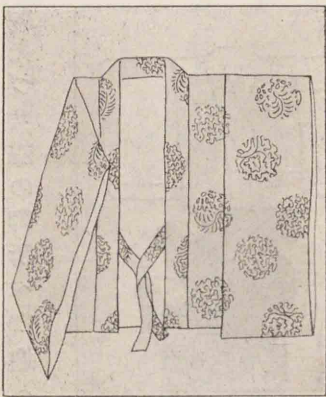


撮取り

蘇芳
二藍の赤みの
勝つたもの。

「今は紅梅は著でもありぬべし。されども萌黄などのにくければ、紅にはあはぬなり。」と語つてゐるが、紅梅色は冬の末から春の始までの季節に相應するが、二月中旬からは櫻萌黄また樺櫻青柳つゝじ重ねなどを著るべき筈であつたからで、紅梅重はもはや時節後れの氣味だが、萌黄色は嫌ひだから、季節後れを承知で今日は紅梅を著た。」と斷られたのである。來賓たる妹の君は、又紅梅重の小袖の、下の方は薄く、上を次第に濃くして、其の上に濃い紅の綾の打衣、少し赤い蘇芳

の織紋の袷に萌黄の固紋の唐衣を著たとあるのは、前にいふ青柳重



唐衣

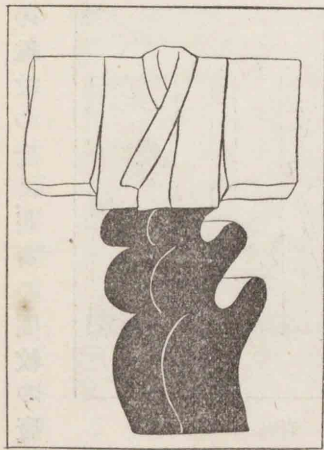
であらう。これは枕草子にあるが、こんな風に必ず季節の花の色、模様からを選んで著るのが例である。源氏物語の末つむ花の巻に、昔物語にも人の御装束をこそまづはいひたれとかいてある通り、作り物語な

どには、一々細かに衣装の色目を寫してゐる。殆ど擧げるに暇がな

5。單に服色の配合だけでは満足せぬ。葺手歌繪を織紋模様に応用したるものなどもあつて、歌を圖案化したのは、恐らく此等が始であらう。それから又、桂を十八枚から廿、廿五枚までも著るやうになつたなどは、面白い趣味、高尙な意匠とも云へぬ、實は馬鹿々々しい流行で、

榮華物語 四十帖、藤原道長の榮華を中心とした宇多天皇から堀河天皇までの編年體の歴史物語。
關白道隆 藤原道長の兄、中宮定子之父、積善寺。
又、釋泉寺とも書く、法興院中の御堂。法興院は攝政藤原兼家の邸二條院である。
一切經供養 新に一切經を書寫して、之を寺院に寄附した時に行ふ法會。
女院 東三條院、證子の女御、道長の妹。

事實だから序に申すが、廿枚の上衣うわぎを着て立ち得なかつた話は、榮華物語に見え、こんな姿で立働の容易に出来ないのを嘲つて「這こひ伏し」と綽名あだ名した事も枕草子にかいてある。
女のみではない。男子も當時の人は一般に服裝に物好ものずきをした。其の一例は、一條帝の時、關白道隆が、積善寺で、一切經供養の法會をするといつて、女院や中宮を御請待した。當時中宮大夫であつた道長が、先づ女院の御所へ御迎へに參つて、供奉し來つて、更に中宮の御供をして、寺へ行かうといふ時、前に女院の御供の時著た同じ服裝で、又中宮の御供をしては、人目がわるいといつて、正服は四位以上黒色に定まつた法規もある事ゆゑ、之を替へる事が出



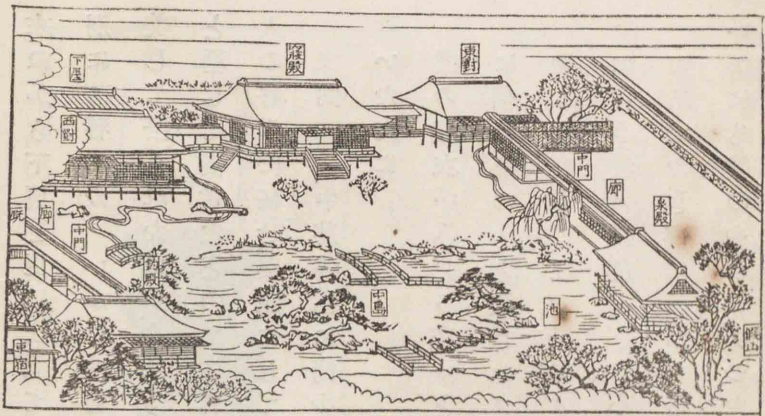
下 襲

來ぬから、下襲を更に仕立て、女院の御供の時と、中宮の御供の時と、別に著替へた。いかにも好事優雅な振舞だと、中宮も清少納言に賞美して語られた事が、やはり枕草子にある。是は後に「一日晴の下襲したがり」と稱して、儀式などのある日、一日を限つて正服束帶の下襲だけを本人の好みに任せ、美麗にして着る風に行はれた始であらう。又同時代、中將齊信に清少納言が對話して、後其の服裝をよく見て書いた文に、

櫻の直衣いみじう花々と裏の色つやなど、えもいはずきよらなるに、葡萄染のいと濃き色いろのさしぬきに、藤の花の折枝ことしく織りみだりて、紅の出衣イデシキヌの色、打目など、輝くばかりぞ見ゆる。次第に白き紫の薄色など、小袖あまた重なりたる、誠に繪にかき、物語のめでたき事に云ひたる、是にこそはと見えたり。いかにも繪のやうであつたらう。是れらは皆想像でも誇張でもな



中將齊信 大政大臣藤原爲光の二男、才學優長、公任、俊賢、行成と共に一條朝の四納言と稱せられた。長元八年薨、年六十九。
櫻 表白裏赤、美麗、きよら、葡萄染、經糸は紅、緯糸は紫の織物、さしぬき

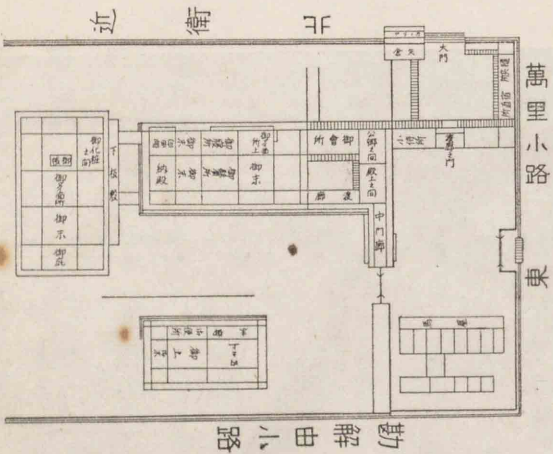


い清女が實見の記述である。

三 殿室の裝飾

かやうな服装をした男女等が、日常住んでゐた家屋の状はどんなであつたらう。其の頃京家搦紳の殿舎は、大かた一定の制があつて、身分によつて地域を占めるにも廣狹の法度がある程で、貴人の家の構造にはあまり異りが無い。中央の寢殿は七間四面で、檜皮葺の屋根に丸木の柱、勾欄付の縁側を四方に取りまはし、左右と後とに對屋といふがあつて、渡廊を以て通路としてある。

それから東西に長く廻廊を以て前庭を圍ひ、渡廊の下から遣水を流して池に湛へ、其の上に釣殿泉殿と雙方に架して、廻廊の真中を中門とする。



（誌雜石玉） 舍館の氏尊利足るけ於に院洞東衛近

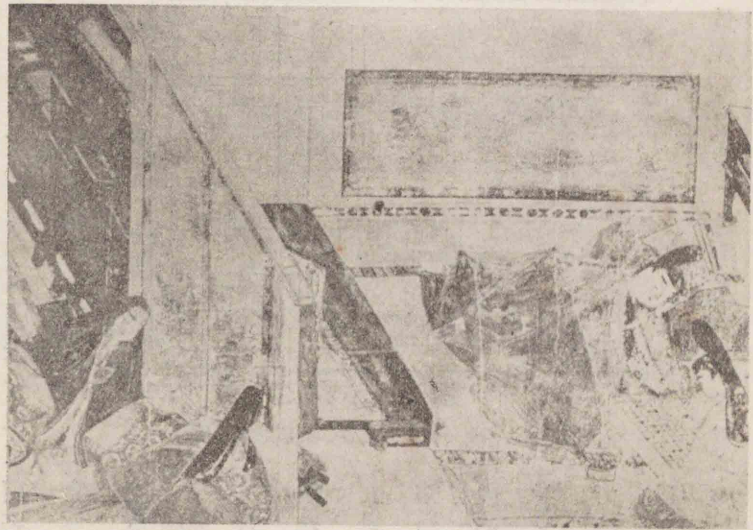
惣體白木造りに、黒塗の格子を釣りあげ、青竹の御簾には眞紅の總を垂れた釣り鉤が下げてある。是れだけには別に意匠の用ひやうも趣味のあらはれもないが、それでも禁中の清涼殿は、孫廂をさし出して、わざと板葺に造られてゐた。檜皮葺では時雨の音が聞えぬから、孫廂だけを板葺にして、時の音を聞こし

孫廂
母屋のめぐりの庇の外に更に出し添へた庇。

海人藻芥
三卷、惠命院宣守の著といふ故實の書。

召さんためだと、海人藻芥といふ書にある。禁中は幾たび焼けても、

大鏡
文徳天皇から
後一條天皇ま
で、攝關は
藤原冬嗣から
道長までの列
傳體の歴史物
語。



(筆能隆原藤) 卷繪物語氏源 飾裝内室代時安平

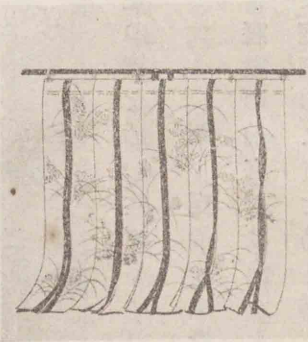
元の御規模に造り給ふの
であるから、殊に變化はな
い、其の佛の一小部分は、今
も京都皇宮の中にある。
花山院は家作の單調を破
り給うて、寢殿や對舍を、作
り續けるやうに仕出され、
車宿くるまやどなどにも、新意匠の造
作を遊ばされたことが大
鏡に見える。
室内は如何といふに、是
れにほゞ一定の裝飾があ
つて御簾の裏に几帳を立

廂の間
客間
二階棚



からくれなゐ
に
ちはやふる神
代も開かず立
田川、からく
れなるに水く
くるとは。
水くくるは水
をくくり染に
すること、紅
葉の流れて紅
しぼりとなつ
たのを云ふ。
源公忠
歌人、大藏卿
國紀の二男。

て、母屋もやと廂ひさしの間の界には壁代かべしろといつて、白絹しろきぬに紫で朽木形くちぎがたなどを染



帳 几

やう、疊たたみの敷きやうにも規則きぎまりがある。そして此の屏風は、何事か儀式
のある時は、必ず新調する例であつた。六枚折、乃至八枚折にして、絹
綾あやの類で張り、一枚毎に下の方に繪をかい、上部の色紙形しきしけがたには時の
學匠、歌仙、能書家にたのんで、詩歌をかゝせる。業平が「からくれなゐ
に水括るとは」とよんだのも、龍田川に紅葉のちり浮かんでゐる畫に
賛した歌、また源公忠が、

裳着

古、女の子が成長して始めて裳を着る儀式。十二三四歳頃、結婚以前に行ふ。

行きやらで山路くらしつ子規いま一聲のきかまほしさとよんだ歌も、旅人が子規を聞いてゐる圖に題したもので、醍醐帝の第四皇女の裳着の御祝の時に、新調された屏風の歌である。此の外衝立、襖障子今の唐紙には、好みの繪が畫かれてあり、貴女の側に必ず立てる几帳にも、織紋染色に心を盡してあるから、楊梅桃李の評語は



まだすく

あながち服飾ばかりでなく、室内の形容詞としてもよからう。簾外に瓶をすゑて、四季折々の

花の枝を挿し、柱にかけた薬玉にも、趣味の程は見えただであらう。

四 庭園の風情

寢殿の前庭には池水を湛へ、池中に中島を築くのが、作庭上の約束で、庭園のことを島と稱したのも其の故である。それには岩をたゝんで瀧水を落すものもある。随つて水石磯巖の布置には、中々注意し

禪師親王
法親王

千里の濱
紀伊日高郡岩代から南部あたりへかけての濱をいふと。

百濟川成
本姓は餘、祖先は百濟の人、有名なる畫家、仁壽三年歿。

巨勢金岡
有名なる畫家、巨勢家の開祖、清和、陽成、光孝、宇多、醍醐の五朝に仕ふ。

西宮左大臣高明
源氏、醍醐帝第十七の皇子、天元五年薨、年六十九。

大饗
大なる饗宴の義、こゝは大に任せられた披露の宴會、中宮定子

て、遠地から巖石を運んで來た。仁明帝の第四皇子、禪師親王の山科の宮には、瀧を落し水を走らせて、面白く作られた庭に、業平が紀州の千里の濱の磯石で、形の良いのを献上した話が、伊勢物語にある。又此の石を立てるのも、多くは畫師の意匠をかりたと見えて、今昔物語に、百濟の川成が瀧殿の石を立てたとあり、嵯峨の大覺寺の庭も、巨勢金岡の指圖によつて立てた石だといふ。

花のない季節に、賓客などを請ずる場合には、喬木に總體造花を附けた事もある。西宮左大臣高明が、正月の大饗の時、池の中島のいと高き松が枝に、ひまなく藤の造花をかけたのが、池波に映じて壯觀であつたと宇治拾遺物語にあるし、中關白道隆が、積善寺供養の節、我が女の一、條帝の中宮を請待して、其の居所にあてた殿の階前には、櫻の造花を樹ゑられた事が、枕草子にある。時は二月の初であつたから、最初梅かと思つたら、一丈餘りの樹に櫻の造花を附けて、花の色つや

なども眞花の咲いたのに劣らないといつて、清女は其の技巧を褒めてゐる。之に就いても當世人の心意氣の行き届いた所が、同じ枕草子に書いてある。それはまづ造花を見せて人を驚かした上に、其の夜雨が降つた所から、曉方中宮の未だ起き給はぬ前に舍人をやつて、其の木を根から掘り取られた事である。折角美しく見せた造花が、雨の爲に濡れて、枝や幹などにまづはり附いては、色も興もさめるから、造り花の成る果の、きたない姿を見せまいとした關白の心意氣を、清少納言も感服して書いておかれた。

是等は一時の技巧であるが、普通の山水庭で満足せず、やや大規模の作庭を企てた者もあつた。小倉百人一首で、お馴染の、河原左大臣源融は、京の六條の私第に、陸奥の鹽がまの浦の景色を摸した庭を作つて、難波からわざ／＼潮水を運んで池にた／＼海人の潮汲み藻しほやく景趣を學ばせたといひ、大中臣輔親は、七條南室町の邸に、丹後

河原の左大臣
源融
嵯峨帝の皇子
寛平七年薨、
正一位を贈ら
る、七十四

大中臣輔親

神祇伯、長曆
二年薨。

ませ垣
竹木で造つた
低くて目の荒
い垣。

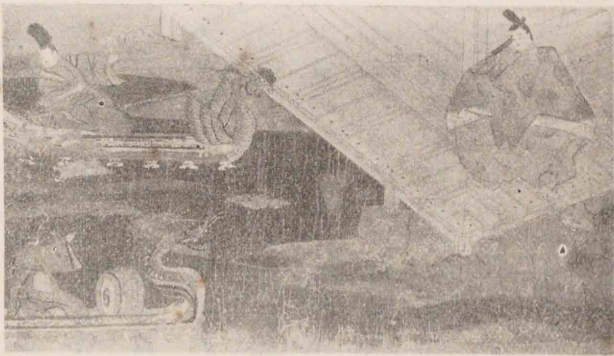
の天の橋立の景をうつして造らせ、池の中島を遙かに遠くさし出し、次第に長く小松を植ゑたと十訓抄に見える。

山水庭の出来にくい場所や、廣からぬ中庭などでは、前栽といつて、花壇やうの物を拵へ、竹のませ垣をゆうて、草花をいろ／＼植ゑませ、これに秋ならば蟲を放つて鳴かせたり、露を置かせて月影をうつしたりしても趣味を添へた。

五 郊外の逍遙

此の殿舎に住み、此の庭園をながめて、花に月に歌を詠じて興を催す事は云ふに及ばず、賓客を請じては龍頭鶴首を刻み付け丹青を彩つた舟を池に浮べ、樂人を乗せ、奏樂舞踏をさせて主客見物した事も、紫式部の日記や、假作小説ながら源氏物語中に幾ヶ所もあるから、實際貴族の間に行はれた事が知れる。この外、花郭公、月雪の爲に、名勝景地に出遊する事も、珍しくない。醍醐天皇の大堰川の行幸のさま

外の花
牛
御車をひく牛
車の跡
車の轍の跡



龍頭鷓首の船

は、紀貫之の序文に書かれ、御堂關白の同所の逍遙には、和歌の船作詩の船、管絃の船の三部を設けて、來賓の勝手に我が好む船に乘らしめ、得意の技藝をなさしめたと、大鏡古今著聞集等にあつて、殊に名高い。又白河院が法勝寺の花見に御幸の時は、折から満開で、

御寺の花、雪のあしたなどのやうに咲き連なりたる上に、わざと豫かねて外のをも散らして、庭に敷かれたりけるにや、牛の蹄もかくれ、車の跡も入る程につもりたるに、花の梢も雪の盛りに降るやうにぞ侍りける。と今鏡に見える。かういふ風に花紅葉を見ても、花紅葉その物より

撰集抄

西行法師の著といはれる佛教文學の書。次の話は、その巻八に出てゐる。

實方中將

左大臣藤原師尹の孫、一條帝に仕ふ、歌人、次の歌で行成の冠を擲ち歌枕を見て參れとて陸奥守に貶せられた。長徳四年卒す。

かくれ
雨をよけて
をこ
バカ

は、別に何物かの風情を添へて趣味を深からしめる。中には餘り風流がつて、却つて滑稽奇異に陥つた話もある。撰集抄に、昔殿上のをのこども、花見んとて、東山におはしましけるに、俄に心なき雨ふりて人々騒ぎあひ給ひけるに、實方中將(櫻ノ木)の下に立ちよりて、

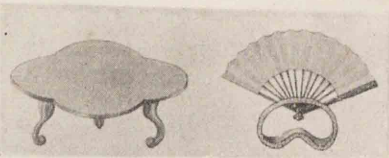
櫻がり、雨はふりきぬ、同じくは濡るとも花の蔭にかくれむ。

とよみてかくれ避け給はざりければ、花より洩るゝ雨にさながら潤ひて裝束しぼりかね侍り。此の事興ある事に人々思ひ合ひけり。又の日齊信中納言、主上にかゝる面白き事の侍りしと奏せらるゝに、行成その時藏人の頭にておはしけるが、歌は面白し。實方はをこなり。とのたまひけり。

とあるが、いかにも行成のいふやうに、馬鹿らしい振舞だ。風雅も趣味も、ここに至つては、笑話になりすぎた。

六 競技の嗜み

郊外まで出遊するのは勿論男子であるが、女子は又室内に在つていろいろの競技に耽つた。それは先づ歌合繪合から、扇合、雙紙合、撫子合、菖蒲の根合などをして、寄り合つては歌の巧拙や意匠の優劣を競うて楽しむ。雷に歌の上手繪のすぐれたなどといふばかりでなく、歌を書く紙の重ねの色や、扇雙紙などなら、それらを載せる臺、即ち洲濱すゐはまといふ器具にまで種々趣向を施し、意匠の限りを盡すのである。中にも薰物たきもの合などになつては、薰香藥の配劑調合の加減によつて其の香の如何を競ふのだが、目で見たり耳で聞いたりする外に、趣味が鼻にまで及んでゐるとは、何と進んだものではないか。



濱

洲

要するに、平安朝貴族の男女は、如上のたしなみ、色々の素養があつ

て、趣味を解し風雅の心に富んでゐた。現代の詞でいはうなら趣味に生きてゐた人達であらう。

(隨筆雜話からすかこ)

上田敏
詩人、英文學
者、文學博士
京部帝國大學
教授、大正五
年歿、四十三。

一六律

上田敏

流轉
輪廻

直覺



上田敏

生は休みなき流れだ。外界の事物に質しても、内界の表象に省みても、不定こそ唯一の必定だ。外來の刺戟と印象、内發の反應と表現、いづれも皆流轉輪廻の相を示してゐる。車輪の廻つて始終なきが如く、一切の物、一物の徳、盡く皆變化の浪に漂つて、動いて已まない。理智の分析も、内心の直覺も、共にこれを解しこれを認める。朝鮮薊の附根までも、とその瓣の一片づゝを剝がして行くやうな分析家にも、終



朝鮮薊

流動の哲學

小我

にこの事は了解せられる。圓かにさも甘い露を包んだ葡萄の果を一目に認める直覺の人にも、この事は悟入し得られる。人生は當來に向つて吶喊する騎兵の大集團に似てゐると説破した現代の哲學者は、印度にも希臘にも發した古への思想を復活したのであつて、近世科學の研究と考説とも補助を得て、あの流動の哲學を唱へ出した。かくて、人は、皆、この瀬の早い大河の濁流にさらはれて、刻々に變化する周圍の水の泡を送迎するに追はれ、寂しい不完全の小我を刺戟する無數の印象に忙殺せられて、多くは唯慌ただしい生存のその日暮しをする。その時、人は、唯、生に従へられて、その意の儘に盲動する物體だ。その人は、無意識に受身に、働きかけられて、漂ひ移るのみだ。

水勢此の如く強大なる流動に對して、人は到底何等の策も施し難く、終に手を束ねて、茫然と、轉變絶間なく、忘却忽ち來る受動の生に甘んじなければならぬか。幸にして、この影の薄い無意識の生より吾等を拯ふものが一つある。

心の鏡を明かにし、わが身の活動を自然にして、さて靜觀すれば、萬物を泛べて走る大自然の流轉には、自ら一定の律があつて、唯雜然として妄りに狂瀾の動搖するので無いことが悟入される。律とは何ぞ、拍子である、節である、間である。節奏といふも可、拍節と呼んでもよい。上下、左右、緩急、遲速、強弱、表裏、明暗、弛んでは張り、張つては弛む、玄妙不可思議の波を支配する根本力であつて、要するに生の本體は偏にこの律に現はれてゐる。

恒久性
萬有
諧調

蟬脫

「深く深く觀よ、然らばそこに音楽がある。」と先人の説いたのは、詩の評論に關した言であつたが、更に深い意味に取ることも出來よう。この世の流轉相も、觀念の眼を明かにして看來れば、そこに何等かの恒久性が窺はれ、生の奥に一種の律が流れてゐるのを認める。萬有の諧調は實にこの律によつて成立してゐる。

この律を捉へよ、その人は生の祕密を悟つた人である。身は自覺なき受動物體の域より蟬脫して、生の流れを制御する能動の生物となり、喜び勇んで生と共に働き、共に創作することが出来る。人をして自由ならしめる生の鑰はこの律だ。

(獨語と對話)

綱島梁川
思想家、名は
榮一郎、備中
の人、明治四
十年歿、年三
十五

一七

靜思雜記

綱島梁川

雪聲

ことしきさらぎの或日、あかつきの夢ふとさはやかに覺めぬれば、紙窓一白、外面は寂として、鳥の聲々のみいと寒げなり。靜かに聽けば、折々しき網る庭の竹樹の聲やなに。或はせゝらぎてゆく小川の音の、斷えつ續きつする如く、或はそ川よるとすべる衣桁の衣のけはひに通ひ、或は砂山くづる、軟砂の水面に落ちぬるかとおやまたる。風ありやなしや、朝日影いまださしのぼらず。刹那は沈々として四境深きが

神と借にたの
にたの
神と借にたの
にたの
にたの

けはひ
通ふ
神と借にたの
しみ
神と借にはた
らく

憂々
あからめもせ
で
にして

他界神祕の消
息

嬌々

如く、忽ちまた憂々として聲あり。急語は暴らかに、緩語は滑らかなり。袂を排して起ち、窓推しあけてあからめもせで白妙の世を打まもらむも、いと心なき業なるべし。垂れこめて、こゝにして、しばらくこの奇しきゆかしきおとづれを冥想せしめよ。あはれ、夢かと辿らるゝこの境、この心、譬へば、われらが人生の旅路に於いて、薄明なる現し世の紙窓一重を隔て、しばしば、他界神祕の消息に心打躍るにも似たるかな。

燈影記

枝ぶりいたましげに瘠せたれど、蒼龍の勢をくねりて、嬌々たる氣を吐く一もとの根あがり小松、青苔の鉢して贈れる友の情をうれしく、ねんごろにその朝夕を護る。夜は淋しき枕

不羈の氣 實在 嵯峨 蘿月 波の音の形容

頭にわれらが瘦軀二つを侘びて、おなじ心に通ふ夢をたのしむ。夢さむれば、何やらゆかしき一燈の下、花より朧ろの姿こぼれて、枝より枝に脉々と生命の通ふ聲すなり。わが小齋のうち書卷の氣砂原とめぐるが中にしも、これぞ見いでたる緑の汀のまづたのもしき心地する。あはれ枕頭の友よ、なれがはかなき面影の中にしも、星を育み月を養ふ大自然の慈恩の心はこもれるものを、されば嵯峨として濤聲を荒海の濱に鼓し、嵯峨として巖上に千秋の蘿月を挂くる偉大の姿なれに、なれも何をか傷み何をか歎かむ。譬ふれば、なれと我と、この奇しき實在の大海原を、會この磯邊に流れあひて、會ここに相得の歡を樂しむ。なれも瘦せたり、我も瘦せたり、なれも物思ひ我も物思ふ。なれは骨勁くして不羈の氣を吐き、我は形

形體を脱す

婆娑

骸を脱して高きを翔らむ心切なり。なれが婆娑たる燈下の影は、わが枕頭の春となりて、我れに華さく愛の心さびしからず。不言の情思一室の夜をこめて、融々たる永年の樂しみに通ふ。

曠野の花

鐘の音霞む花の雲に、ひねもす人の山分けほどひて、さて歸りて、わが家の一本櫻に春のまことのあはれを知るならひぞかし。

ことし、秋は初めの垣根の薺花、朝なくの露にすゞしきころ、庭の片隅に打すてられたる古鉢の、去年の生命の一粒を辛くも宿したるが、いつの間に萌え出でけむ、一尺ばかりなる蔓

生命の通ひ路

病葉

精彩奕々

天地のこゝろ

莖のやうく力なげに青空にあこがれそめて、青黄色したる
 薄葉二つ三つ著きたり。もとより心にもとゞめでありける
 が、ある朝ふと起き出で見れば、さばかりわびしかりし蔓莖に、
 白き大輪の花たゞ一つ、あはれ美しくしうも、け高うも咲きつる
 かな。生命の通ひぢいとくるしきこの蔓莖にして、天つ日影
 の恵みいと薄きこの病葉にして、思ひきや、白一點精彩奕々、露
 に輝き、光を含み、靈しき天地のこゝろを優に咲きいでなむと
 は。折からを垣根に咲き盛れる花のいろく、皆けおされし
 心地して、われはこの花一つに心動きぬ。

これもことし、秋の暮れつかた掌ばかりの浅き鉢に、星月夜
 となん呼ぶ野菊數株、まばらに植込みたるをさるかたよりお
 くりこしぬ。黄なる小輪の花七つ八つ、頭そろへて何ごとを

一撮土

千里の外に動

かうちさ、やくさまのいとしほらし。鉢に盛れる土には、お
 のづからなる野らなんどのやうに、蒼苔とところく、に生えた
 るが、なほ視れば、そこにもさ、やかなる草花の一むら、自然の
 一廓を造りなしたり。われは、この一撮土に生ふるはかなき
 草花に打むかふ折々、秋の花野の風情おのづから千里の外に
 動くを覺えたり。

歸依の心
 ※芭蕉の句、山
 路来て何やら
 ゆかし葦草
 (野晒紀行)

萬馬の蹄の下に、泥海、なんどのやうに、踏みあらされし曠野の
 中にして、ある日ひそかに大いなる自然の力を、縁深う萌え出
 でて、色香もたへに咲きほこりたる一本小草の花を見いでた
 る。誰れかは、その大膽にして、歸依の心一すぢに高き姿を慕は
 ざる。あるは山路の間に、行き暮れて、草枕わびしき旅人の、何
 やらゆかしき葦草の一本に、たまくと心躍りては、熱き涙も下

ソロモンの云々
聖書、新約馬太傳第六章、二十八節
何の木
芭蕉の句、卯辰紀行に出づ、伊勢山田にての作。
西の國の一詩人云々
英國の詩人ワーズワズ (W. Wordsworth) 一七七〇—一八五〇)
の詩句 To me the meanest flower that blows can give thoughts that do often lie too deep for tears.

りぬべし。ソロモンの榮華を競ひし花のふるごとは、更にいはず、この世を夢と悟りすてたる達觀の一俳人をして、何の木の花とも知らず匂ひかなと、優しき心の一ふしを奏でいてしめたる花のこゝろの、今更問はまほしく、さては西の國なる高調の一詩人をして、路のべのいともあやしき草花だに涙に餘る深き思ひを湛ふると、咏み出でしめたる言の葉ぞ、想ひ出でらるゝ。

山高きが故に貴からず、花驕れるが故に妙ならず、籬落に著き流水に漂ふ名もなき小草の花にだに、われらが拾ふべき力と榮と詩と恵とは、いとさはにはあるをや。

(梁川文集)

18-25
11
11

一八 朗 詠

春 興

野草芳菲紅錦地 遊絲繚亂碧羅天 劉 禹 錫
も、しきの大宮人は暇あれや

春 夜

背燭共憐深夜月 踏花同惜少年春 白 居 易
はるの夜の闇はあやなし梅の花

色こそ見えね香やはかくるゝ

凡河内躬恒

納 涼

源英明

平安時代の文人。天慶三年(一六〇〇年)歿す。

中務

平安時代の宮女。中務卿敦慶親王の女。

許渾

唐の詩人。

明日香皇子

桓武天皇の皇子。

源公忠

歌人。天曆二年(一六〇八年)歿す。年六十。

池冷水無三伏夏 松高風有一聲秋

源英明

したくゝる水に秋こそ通ふらし

むすぶ泉の手さへすゞしき

中務

杜鵑

一聲山鳥曙雲外 萬點水螢秋草中

許渾

さつきやみおほつかなきを杜鵑

なくなる聲のいとゞ遙けき

明日香皇子

ゆきやらで山路くらしつ杜鵑

源公忠

秋興

林間煖酒燒紅葉 石上題詩拂綠苔

白居易

秋はなほ夕まぐれこそたゞならね

(此等句はさみしい)

藤原義孝

天延二年(一六三四年)歿す。年九十六。

をぎの上風はぎの下露

藤原義孝

雪

雪似鷺毛飛散亂 人被鶴髻立徘徊

白居易

雪ふれば木ごとに花ぞ咲きにける

いづれを梅とわきて折らまし

紀友則

紀友則

歌人。古今集撰者の一人。

祝

嘉辰令月歡無極 萬歲千秋樂未央

源英明

長生殿裏春秋富 不老門前日月遲

慶滋保胤

君が代は千代にやちよにさゞれ石の

いはほとなりて苔のむすまで

よみ人知らず

慶滋保胤

平安時代の文人。

西田幾多郎
哲學者、文學
博士、元京都
帝國大學教授。

一九 知と愛

西田幾多郎

主客合一
我物

知と愛とは、普通には全然相異なつた精神作用であると考えられてゐる。しかし、余はこの二つの精神作用は決して別種のものではなく、本來同一の精神作用であると考へる。然らば如何なる精神作用であるか、一言にていへば主客合一の作用である。我が物に一致する作用である。何故に知は主客合一であるか。我々が物の真相を知るといふのは、自己の妄想臆斷、即ち所謂主觀的のものを銷磨し盡して物の真相に一致した時、即ち純客觀に一致した時、始めて、これを能くするのである。例へば、明月の中に薄黒い處のあるのは、兎が餅を搗いてゐるのであるとか、地震は地下の大鯰が動くのである

とかいふのは主觀的妄想である。然るに、我々は、天文地質の學に於て、全然かゝる主觀的妄想を捨て、純客觀的なる自然法則に従うて考究し、爰に始めて、此等の現象の真相に到達することが出来るのである。我々は、客觀的になればなるだけ、益よく物の真相を知ることが出来る。數千年來の學問進歩の歴史は、我々人間が主觀を棄て客觀に従ひ來つた道筋を示したものである。

次に、何故に愛は主客合一であるかを話して見よう。我が物を愛するといふのは、自己を捨てて他に一致するの謂である。自他合一、その間一點の間隙なくして、始めて、眞の愛情が起るのである。我々が花を愛するのは、自分が花と一致するのである。月を愛するのは、月と一致するのである。親

が子となり子が親となり、此處に始めて親子の愛情が起るのである。親が子となるが故に、子の一利一害は己の利害のやうに感ぜられ、子が親となるが故に、親の一喜一憂は己の一喜一憂の如く感ぜられるのである。我々が自己の私を捨てて、純客觀的即ち無私となればなる程、愛は大きくなり深くなる。親子・夫妻の愛より朋友の愛に進み、朋友の愛より人類の愛に進む。佛陀の愛は、禽獸草木にまでも及んだのである。

斯の如く、知と愛とは同一の精神作用である。それで、物を知るにはこれを愛せねばならぬ、物を愛するにはこれを知らねばならぬ。數學者は自己を捨てて數理を愛し、數理そのものと一致するが故に、能く數理を明らかにすることが出来るのである。美術家はよく自然を愛し、自然に一致し、自己を自

然の中に没することによりて、始めて、自然の眞を看破し得るのである。又、一方から考へて見れば、我は我が友を知るが故にこれを愛するのである。境遇を同じうし、思想趣味を同じうし、相理解すること愈、深ければ深い程、同情は益、濃やかになる譯である。しかし、愛は知の結果、知は愛の結果といふやうに、この兩作用を別けて考へては、未だ愛と知との眞相を得たものではない。

知は愛である、愛は知である。例へば、我々が自己の好む所に熱中する時は、殆ど無意識である。自己を忘れて、唯自己以上の不可思議力が獨り堂々として働いてゐる。この時は、主もなく客もなく、眞の主客合一である。この時が、知即ち愛、愛即ち知である。數理の妙に心を奪はれ、寢食を忘れてこれに

直覺

耽ける時、我は數理を知ると共にこれを愛しつゝあるのである。又、我々が他人の喜憂に對して、全く自他の區別がなく、他人の感じる所を直ちに自己に感じ、共に笑ひ共に泣く、この時、我は他人を愛し又これを知りつゝあるのである。愛は他人の感情を直覺するのである。池に陥らんとする幼兒を救ふに當りては、可愛いといふ考すら起る餘裕もない。

抽象的概念

普通には、愛は感情であつて、純粹なる知識と區別されなければならぬといふ。しかし、事實上の精神現象には、純知識といふものもなければ純感情といふものもない。此の如き區別は、心理學者が學問上便宜のために作つた抽象的概念に過ぎない。學理の研究が一種の感情に依つて維持せられねばならぬやうに、他を愛するには一種の直覺が基とならねばな

人格的
悲人格的

らぬ。余の考を以て見ると、普通の知とは、非人格的對象の知識である、たとひ對象が人格的であつても、これを非人格的として見た時の知識である。これに反し、愛とは人格的對象の知識である。たとひ對象が非人格的であつても、これを人格的として見た時の知識である。兩者の差は精神作用そのものにあるのではなく、寧ろ對象の種類によると云つてよろしい。而して、古來幾多の學者哲人の云つたやうに、宇宙實在の本體は人格的のものであるとすると、愛は實在の本體を捕捉する力である、物の最も深き知識である。分析推論の知識は物の表面的知識であつて、實在そのものを捕捉することは出來ぬ。我々は、愛によつてのみこれに達することが出来る。愛は、知の極點である。

實在

(善の研究)

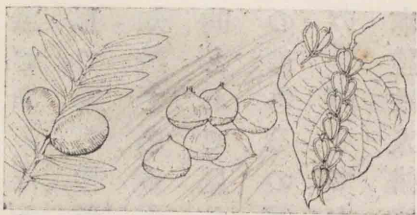
井原西鶴
近世の有名な
小説家、元
祿六（二三五
三）年歿、年
五十二、

反をかへす

これは悲しき
年の暮に

二〇 合はぬ算用

榎乾栗神の松やま草の賣聲も忙はし



く、餅搗く宿の隣に煤をも掃はず、二十八日まで髭も剃らず、朱
鞆の反をかへして、春まで待てといふに、是非
に待たぬか。」と、米屋の若い者を睨みつけて、直
ぐなる世を横に渡る男あり。名は原田内助
りくと申して、かくれもなき浪人、廣き江戸にさへ
住みかね、この四五年、品川の邊に店借りて、朝
の薪に事を缺き、夕の油火をも見ず、これは悲
しき年の暮に、女房の兄半井清庵と申して、神
田の明神の横町に醫師あり。この許へ無心の状を遣はしけ

送られける。

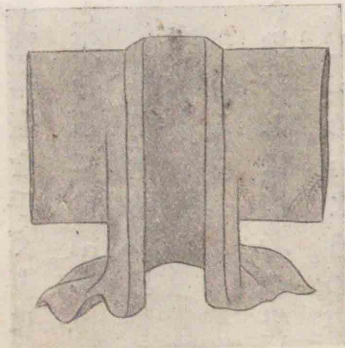
合力

るに、度々迷惑ながら見捨て難く、金子十兩包みて、上書に「貧病
の妙薬金用丸萬によし。」と記して、内儀の方へ送られける。
内助喜び、日頃別して語る浪人、影間へ、酒一つ盛らんと呼び



井原西鶴

に遣は
し、幸ひ
雪の夜
の面白
さ、今ま
では崩



紙子

れ次第の柴の戸を開けて、さあ、これへ。」といふ。以上七人の客、
何れも紙衣の袖を連ね、時ならぬ一重羽織、どこやら昔を忘れ
ず、常の禮儀過ぎてから、亭主の罷り出て、私仕合せの合力を請

一作
輕口

※千秋樂は民を撫で、萬歳樂には命を延ぶ。相生の松風、颯々の聲で樂しむ。論曲、高砂。極りける。

めいよう
身晴

けて、おもひの儘の正月を仕る。」と申せば、各にんじんそれはあやかりもの。といふ。それにつき、上書に一作あり。」と、件の小判を出せば、
「さて、輕口なる御事。」と、見てまはせば、盃も數重なりて、よい年忘れ、殊に長座。」と、千秋樂を謳ひ出し、爛鍋鹽辛壺を手ぐりにしてあげさせ、小判も先づ御仕舞ひ候へ。」と、集むるに、拾兩ありしうち一兩足らず。座中居直り、袖など振ひ、前後を見れども、いよいよ無いに極りける。

主人の申すは、その内一兩はさる方へ拂ひしに、拙者の覺え違へ。」といふ。「只今まで、たしか拾兩見えしに、めいようの事ぞかし。兎角は名々の身晴。」と、上座から帶を解けば、その次も檢めける。三人めにありし男、澁面つくりて物をも言はざりしが、膝立て直し、浮世にはかゝる難義もあるものかな。某は身

棄つる。

※後藤氏、寛永八年(三九)歿す。

革坂

ふるふまでも無し、金子一兩持ちあはすこそ因果なれ。思ひも寄らぬ事に一命を棄つる。」と思ひ切つて申せば、一座口を揃へて、「こなたに限らず、あさましき身なればとて、小判一兩持つまじきものに非ず。」と申す。如何にも、この金子の出所は私持ち來りたる徳乗※の小柄、唐物屋十左衛門方へ一兩二歩に昨日賣



ること紛れはなけれども、折節悪し。常々談り合せたる好みには、生害に及びし後にて御尋ね遊ばし、屍の恥をせめては頼む。」と申しも敢へず、革柄に手を懸くる時、小判は是にあり。」と丸行燈の陰より投げ出せば、さてはと事を鎮め、ものには念を入

内證

なりける。

御出しあり。

異なもの

れたるが良い。」といふ時、内證より内儀聲を立て、「小判は此方へ
 参つた。」と、重箱の蓋につけて座敷へ出されける。これは、宵に
 山の芋の煮染物を入れて出されしが、その湯氣にて取りつき
 ける、さもあるべし、これでは、小判十一兩になりける。
 何れも申されしは、「この金子、ひたもの數多くなることめで
 たし。」といふ。亭主申すは、「九兩の小判、十兩の詮議するに、十一
 兩になる事、座中金子を持ち合せられ、最前の難儀を救はんた
 めに御出しありしは疑ひ無し。この一兩、我が方に納むべき
 やうなし、御主へ返したし。」と聞くに、誰返事の時もなく、一座
 異なものとなりて、夜更け鶏も鳴く時なれども、各立ち兼ねら
 れしに、「この上は、亭主が所存の通りに遊ばされてたまはれ。」と
 願ひしに、「兎角、主の心隨せに。」と申されければ、彼の、小判を一升

榊に入れて、庭の手水鉢の上に置き、誰方にも、この金子の
 主、取らせられて御歸りたまはれ。」と、御客一人宛立たしまして、
 一度一度に戸をさしこめて、七人を七度に出して、その後、内助
 は手燭ともして見るに、誰とも知れず取つて歸りぬ。あるじ
 即座の分別、座馴れたる客のしこなし、彼此武士のつきあひ格
 別ぞかし。

(天下馬)

二一 裾野の雨

近松門左衛門

近松門左衛門
近世隨一の劇作家、名は杉森信盛、巢林子、平安堂等の號あり、享保九(二三八四)年歿、七十一。

唯急げ
※相模國足柄郡の地名



近松門左衛門

降りすさぶ五月雨くらく雲とぢて、無^み慚^{ざん}や鬼王^{おに}團三郎とまらんといふも主君の爲故郷へ歸るも奉公の忠は同じ忠ながら東西わかぬ昔より形に影の添ふ如く、片時離れぬ曾我殿原最後の伴にはづる事、屍の上の心外と急ぎの道も足遅く、ヤレ團三郎、これは急なる御使、歩め〜。いや鬼王殿こそ足遅けれ、急ぎ給へ、唯急げ。と言へども後へ引戻す、やうやう三里の道ばかり、更けてその夜も夜半過ぎ、八^{はち}的^{てき}が原にぞ

著きにける。

なほ降りしきる雨風に、一際すぐれて蓼々^{れいれい}と、沖うつ浪か雷かと、兄弟後を見返れば、こは如何に、富士のねがたの松かげに、數萬の松明八方に行き違ひ、かすかに聞ゆる鯨波の聲、耳をすませば人馬の馳せ違ふ音、雨に響き嵐につれて、唯今、敵の寄せ来る如く、高提燈と覺しくて、ばつと集りばつと散り、岩にせか^つる、早瀬川、螢亂る、如くなり。是ぞ正しく御所の假屋の順道、何事がな出來つらんと、暫し怪しみ立つたりしが、ア、思ひついたり、御兄弟、唯今、祐經が假屋へ夜討に入り給ふよな。疑ひも無いその騒ぎ、エ、心もとなや、氣遣はし、本望を遂げられしか、討ち損じ給ひしか。と、二人は足も地につかず、日本國が集つて、たとひ鬼神なればとて、そもや、生けて置くべきか。現在

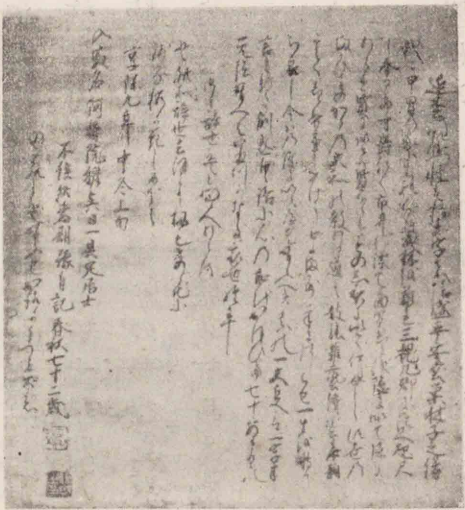
何事がな

蓼々

よつく
刀の冥加
兄者人

俱生神の帳面
まいか

の下人が主の最期を遠目に見て、刀に血さへ附けざるは、よつく刀の冥加に盡き果てし。兄者人。弟。死ぬに死なれぬ口惜しや。と、拳を握りぢだんだ踏み、どうと坐して泣き居たり。のう鬼王殿、母君の御使は大事といへども小事なり。御勘當は受くるとも、安閑と見て居られず、このうちに駆けつけ、せめて祐經めが下人なりとも討ちとめ、俱生神の帳面を塞ぐまいか。オ、いみじくもいうたり、サア来い。と、立ちあがり身繕ひ、濡れたる袂絞り上げ、帯締め直すその間、次第次第に松明消え、鯨波の聲も收りて、二三町も駆けけるが、鳴り靜つて曉の五月雨晴る、雲間の星、鐘鳴る方や清見寺、田子は浦風富士は雪、夜もしらじらと明けにけり。二人は勇める力も落ち、行きもやらず立つたる處に、曾我兄弟、夜前祐經を討つたると、裾野よりの早飛



近松門左衛門築蹟

來れ。」と木蔭に立ち寄り見物す。

脚、鎌倉よりは見舞の早打、引きもきらぬその中に、祐成時致に討たれたる手負の人々、下人、親類看病して鎌倉へ引き取るとて、往來擧つて立ち騒げば、鬼王兄弟、力を得、主君の太刀の切口見て、思ひ出にせん、いざ

(曾我扇八景)

りん

草創燕雜

二三 元祿の三文豪

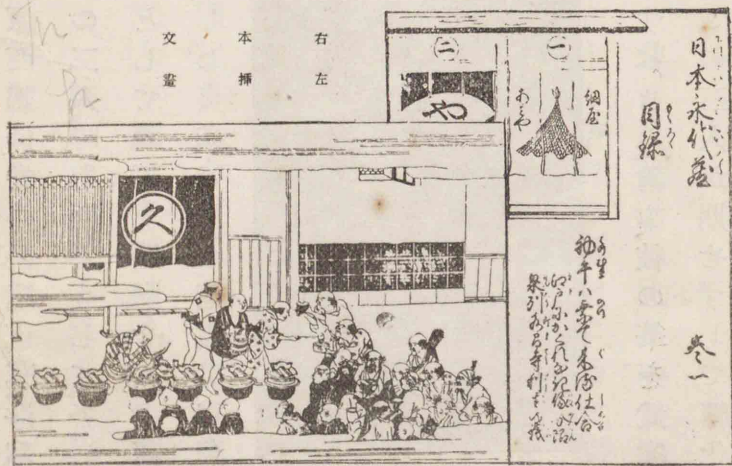
藤井 乙男

江戸時代に於ける文化の興隆を説く者、先づ指を元祿に屈す。實にや、元和偃武よりここに七十年、世は、兵革の響を忘れて、漸く泰平の光に浴し、草創燕雜の機運は、正に轉回して整理修飾の時代となり、數十年間、人々の胸奥に蟄伏鬱積したりし精神的需要は、種々の形體を取りて、今や、春風膏雨の時を得、争うて蕾を破り、千紫萬紅、目もあやに咲き出でぬ。

元祿は、文藝復興の時代にして、また、その發生の紀元たり。かくて、その新に起れるものは勿論、再び興りしものも、皆、清新の風に富み生氣潑刺たり。元祿文藝の貴ぶべきは、即ちこの點にあり。時世の要求は、文學技藝に、この約束を奉ずべく、諸

指麾

- 一、貞享三年歿す。
- 二、元祿十四年歿す。
- 三、寶永三年歿す。
- 四、仁齋は寶永二年歿す。東涯は元文元年歿す。
- 五、享保十三年歿す。
- 六、元祿七年歿す。
- 七、享保九年歿す。
- 八、享保元年歿す。
- 九、元祿六年歿す。



浮世草紙

道の豪傑を指麾驅使したるもの如し。國學の下河邊長流、契沖阿闍梨、戸田茂睡、儒學の伊藤仁齋、父子萩生徂徠、繪畫の菱川師宣、英一蝶、尾形光琳など、孰れも皆この特色を發揮したる大家鉅匠ならざるなし。この時に方つて、中流以下の社會を相手とする俗文壇に三偉人を出せり。三偉人とは誰ぞや。浮世草紙の井

一〇、元祿七年歿す。
一一、享保九年歿す。

舊寶

正法眼
一二、正徳四年歿す。

原西鶴、俳諧の松尾芭蕉、淨瑠璃本の近松門左衛門、是なり。この三人、時を同じうして、各特殊の方面に旗幟を翻し、名聲籍々として天下を風靡せり。西鶴が浮世草紙に得意の諸作を出し、貞享三年は芭蕉が貞門談林の舊寶に安んぜずして、古池



淨瑠璃本

の一句に正法眼を開き、近松が竹本義太夫の爲に、始めて出世景清を作りし時なり。この時、西鶴四十五、芭蕉四十三、近松三十四。年齢事業兩つながら西鶴を以て先輩とすべきも、爾來、彼の筆を武家物、町人物に轉じたるより觀れば、この三人が、期せずして轉化の時期を同じくせるも、奇なりと

いふべし。

士林桑門
騷客

※天和二年歿す。

蕉風俳諧の趣味は幽寂閒適を旨とす。浮世の利慾に眼を光らし、俗界の歡樂に足を空なる京阪の町人、いかでかこれに満足すべき。芭蕉が江戸を中心として、風化を四方に及したるも、その門徒は、多く士林桑門の騷客より成れり。されば、彼をして、蕎麥と俳諧とは上方の風土に適せずと放言せしめたるも、亦故なきに非ず。談林風は、談諺を旨とし新奇を競ひ、俗耳を喜ばしむること、遙かに蕉風の上にある。京阪は、西山宗因起りてより、久しくその根據地たりしも、流行時移りて、漸く世人の厭倦を招けり。西鶴、談林の驍將を以て、浪華の重鎮たり。好んで人事を詠じ、小説的著想の佳句、往々誦すべきものあれども、鶴の鶴たる本領は浮世草紙にあり。近松も亦俳諧

※實永八年歿す。

輕雋

世の
初形を
西鶴

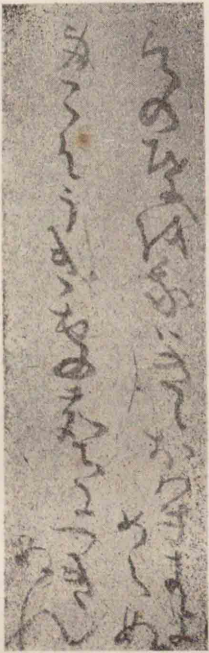
を西鶴に問ふと稱せらる。されど、その句殆ど傳はらず。この二人は、固より芭蕉と俳諧を比すべきに非ず。唯、二人者の著作中、その趣味文法に於て、多少俳諧の影響あるを注目すべしと爲すのみ。西鶴、宇治加賀掾のために『曆』の作あれど、淨瑠璃に於て、近松の敵に非ざるや言ふを俟たず。

この三子者、各、獨特の長技を揮うて、ここに、絢爛たる元祿文藝の花は、東西の野に咲き満ちぬ。芭蕉の清淡、西鶴の放縱、近松の溫雅、その人となりを異にするに隨うて、文もまた高雅、輕雋、秀潤の差あれども、俱に、一代の粹たるを失はず。元祿の文壇、國學に儒學に、豪傑の士乏しからざるも、この三人なかりせば、その落莫想ひ見るべきなり。

二三 御代の古道

心ある人よ一夜の宿かりて

なる、もり証し明日の故郷



讀筆 沖 契

契

沖

あがりたる御代の古道あれに寄り

ひろき昔比しのばほ、かな

戸

田 茂 睡

三三六
三三六
歌は大和言の葉
なれば、人のい
ふ詞を歌に詠ま
ずといふことな
し。(直言書)

(一)
三三六
後の歌はよけれ
ども、心より起
れるは稀なり。
(河社)

(三) 二七五—二四三
我が心につくろ
ひたることな
く、すらすらと
詠み出すべし。
(歌體約言)

(四) 二七五—二四三
歌ちふものは、
狭きが如くにし
て廣く、ものよ
わらに聞えて強
しかれ。(萬葉
考)

(五) 二七五—二四三
歌は物のあはれ
を知るより出で
來るものなり。
(石上私淑言)

(六) 二七五—二四三
古の風は詠むと
ても、強ちに遠
き古言を用ひん
とするは惡し。
(芳宜閑歌話)

(七) 二七五—二四三
己が好める方に
つきて、己が姿
を立てて詠むべ
きものなり。
(歌がたり)

(八) 二七五—二四三
一ふしと思ふや
やがてすなほな
る心のゆがむ始
ならまし。(六帖
詠草)

(九) 二七五—二四三
歌はことわるも
のに非ず、調ぶ
るものなり。(隨
所師説)

(一〇) 二七五—二四三
凡人の耳には入
らじ、天地の心
をたへにもらす
我が歌。(志濃夫
廼舍歌集)

ものゝふのかたどりに立つる鋏形の

田安宗武

ながの絶がしはを見れど飽かずけり

賀茂真淵

飛驒匠ほめてはをれる眞木柱

立てし心を動かざらまし

本居宣長

さし出づゆこの日の本の光を望

高麗唐土を春を知るらぞ

加藤千蔭

名にしおふぬみ見るこぞもならの葉に

おく白露の絶ぐみならばや



村田春海

春の海や東風吹花絶ゆる夕なぎに

霞む名残瘴雨になりゆく

小澤蘆庵

松に吹く風も嵐ふなりにけり

北窓ふたげ冬ぶもり妙む

香川景樹

ぬきのねをこの浦こ此可にかゝりミテ

松のあげふぞ浮島ケ原

井手曙覽

正宗比太刀の刃をりも國のため

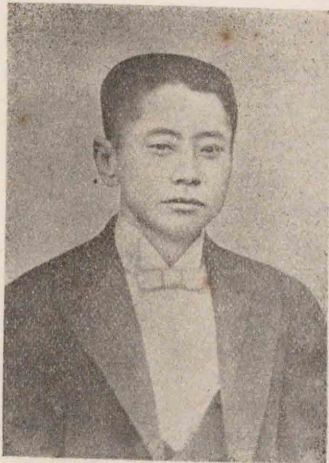
鋭を筆の鋒ふほむみむ

藤岡作太郎
國文學者、文
學博士、東京
帝國大學助教
授明治四十三年
年歿、年四十
一。

磅礪

二四 國民思想の變遷

藤岡作太郎



藤岡作太郎

上古は日本固有思想の磅礪せる時代にして、その文學も、國民本來の雄大快活なる性情を、あるがまゝに表現せり。記紀の傳説歌謠、祝詞など、即ちこれなり。儒佛二教の傳來と共に、文化は長足の進歩を遂げ、文學美術皆これが感化を蒙れりと雖も、なほ急劇に國民根柢の思想を變化せしむるに至らず。奈良朝平安朝は、儒佛の影響の著しき時代たるに相違なきも、一面より考ふる時は、また、太古以來の國民性の最も爛熟せる

作太郎

辭別伊勢坐天照大御神能大前白
皇神能見露坐四方國者天能坐立極國
能退立限青雲能露極白雲能坐立向伏限
青海原者梅枕不干舟能至雷極大海原
舟滿都都氣能自陸住道者何緒縛堅
警根本根履佐久跡馬凡至雷限長道無
開立都都氣能扶國者廣久岐國者平久
遠國者八十綱打挂能引寄如事皇大御神
能寄奉及荷前者皇大御神能大前能如橫
山打積置能殘及平聞者又皇御孫命御世
手長御世能堅警能常能齊比奉茂御
世能幸國奉故皇吾睦神漏伎神漏弥命能
宇事物頭根衝拔能皇御孫命能宇豆能幣
能孫能竟奉能宜

新 年 祭 祝 詞 の 一 節

時代と謂はざるべからず。平安朝に於ては漢文學大に行はれ、わけて、嵯峨天皇の御代の如きは、詩賦唱和の風盛にして、文章博士の名獨り他を壓したるは事實なれども、これを以て儒教の勃興せるものと見るべからず。佛教亦同じく、文學美術上の勢力は否むべからざれども、世人の内的生活には、させる交

現世佛教
準繩

渉を認むるを得ず。要するに、これ現世佛教なり。さらば平安朝に於て、道德を支配すべき準繩は如何なりしぞ。當代貴族の間には、情念趣味を重んずる風ありて、その結果は、情趣の中庸を得るを以て、道德律と爲すに至りしなり。

中古は如何。さしもに腐敗を重ねたる佛教も、平安末期より面目を一變し、淺薄なる形式的現世的色彩を脱して、著しく宗教的内容的傾向を帯び來れるを見る。淨土一向宗生れ、禪宗傳はり、日蓮宗起りたるは、時世の要求の然らしめし所にし、その新なる教義は大いに國民の覺醒を喚起せり。僧侶は、奈良朝このかた、外國文明の輸入者として、一國文化の上に主要なる地位を占め來りしが、鎌倉以後は殊にその然るものありて、衣食住の如き、ここに一轉期を劃し、寢殿は書院造となり、

饅頭
金團

數
株守

炳焉
範疇

饅頭・金團を食ひ、茶の湯はじまるなど、皆禪僧の傳ふる所にし、佛像以外の繪畫さへ、總べて佛教趣味を帶ぶるに至りしも、五山等の影響より出でしこと疑を容れず。かく、鎌倉以後、佛教は、深く人心秘奥の琴線に觸れ、また、平安舊時のものに非ず。乃ち、文學も、佛教思想を中心とするに至れるも、これ、自然の數のみ。翻つて思ふに、平安朝の文學は、貴族公卿の文學なり、而して、公卿の文學が、古傳を株守して沈滞せる間に、實力は、はやく僧侶に移れるなり。平家物語は、灌頂の卷を置き、六道の沙汰を説けるにあらずや。謠曲の多くは、佛教的色彩を帶ぶるに非ずや。繪卷物の殆ど總べては、神佛の炳焉たる靈驗を説いて、民衆の信仰を促せるに非ずや、孰れか、これ佛教の範疇を出でたるものぞ。

※元和五年歿す。
年五十九。

徳川時代に於ける漢學は、一代文化の指導者なりき。一般民衆の佛教に對する崇敬の念は、全く地に墮ちざりしと雖も、僧侶が暖衣飽食に甘んずるに至りしと共に、儒學の勢力は、反比例して、漸く人心を收攬し、藤原惺窩以下の儒者出て、ここに佛教を壓倒せり。この趨勢は、繪畫に就いて見るも、また、明かにして、東山時代において、山水の外、寒山拾得、達磨など、わけても禪宗に關するもの多かりしが、桃山時代に於ては、既に、文王、武王、二十四孝等の圖像、さては、耕織圖など、盛に出て來て、夙に變遷の運を示しぬ。

我が國に於ける漢學・佛教の消長を思ふに、漢學先づ傳はり、佛教後に傳はりしと雖も、前者は常に後者に壓せられ、未だ曾て分離して勢力を爲すに至らざりき。朱子學の如きも、鎌倉

度會延佳
元祿三年卒す、
年七十六。
山崎闇齋
天和二年歿す、
年六十五。

祇園南海
寶曆元年歿す、
年七十五。
服部南郭
寶曆九年歿す、
年七十七。

時代に於て、五山の間に胚胎しながら、その頭角を表はし來れるは、遙かに後世にあり。今や、時勢遷りて、兩者の地位は顛倒し、昔は僧侶儒學を兼ねたるに、ここに至りて、純粹の儒學者を生ぜり。徳川家康天下を經綸し、儒教を以て人心の歸嚮する所を定めんとす。趨勢固より察知すべし。かくて、儒教の盛運につれて、從來、佛教的解釋を附し來りし神道に對しても、儒教的解釋を施すに至れり。度會延佳の伊勢神道が周易の理を含めしが如き、山崎闇齋が垂加神道を起して、朱子の學説を敷衍せしが如き、即ちこれなり。

此の如きは、江戸時代前半期の狀勢なるが、後半期に至りては、詩文の學、一時に盛にして、祇園南海、服部南郭等の文人墨客輩出し、詩を賦し、畫を作り、悠々自適、昇平の春を樂しめり。さ

曲亭馬琴
嘉永三年歿す、
年八十二。
傀儡

常套手段

れど、漢學の倫理的方面も閑却せられたるに非ず。曲亭馬琴の描出せる人物が、何れも儒教の精神を具體化する傀儡の如く、情念を抑へて意志を重んずることは、正に、元祿に於ける小説中の人物と好個の對照をなせるものといふべし。蓋し、從來の典型を打破して、自由精神の發露を期せる元祿期の平民文學は、潑刺たる生氣、自ら何物にも捕へられざる點ありしなり。しかも、小説が勸善懲惡を標榜せるは、一日の事にあらず。教訓的口吻を以て節章を始むる常套手段は、元祿期に於ても、既に、屢、見る所なり。而して、此等の思想は、明治も稍、進める頃まで、遂に、打破せらるゝに至らざりしなり。更に、轉じて、武士道に就きて述ぶる所あらんか。武士道や、これを廣義に解すれば、開闢以來、日本民族の血管に漲れる國

助丁丈部造人
磨の作
今奉部與曾布
の作
しこの御楯

民精神なり。しかも、これが、儒佛二教によりて、その發達を助長せられしは、争ふべからざる事實にして、いはば、根柢を國民精神に置き、外來思想によりて、これを訓練せるものなり。萬葉集中の防人の歌に、
大君の詔かみことしこみいそにふり海原わたる父母をおきて
今日よりはかへりみなくて大君のしこの御楯といでたつ
われは
とあるが如き、また、稱徳天皇が、關東人の忠勇を愛でたまひ、劍を賜うて、特に朝廷の護衛とせられし時、
この東人は常に曰く、額には矢は立つとも、背は矢は立たじ
と言ひて、君を一つ心もちて護るものぞ。此の心知りて汝
仕へと詔り給ひし大詔おほきことを忘れず、かくの狀さまを悟りて諸東國あつまくに

宣命

の人ども謹しまり仕へまつれ。といふ宣命を下したまひしが如き、皆熱烈なる武士道精神の發露せるものと謂ふべきなり。かくて世と共に鍛はれ來り鍊られ來れる武士道は、遂に、その要綱として、忠誠・武勇・名節・禮儀・清廉・潔白・練膽・制慾・勤儉・質素等を重んじたるが、此等の主義の漸く體を具へ來りし徑路は、また、文學の上に於て、これを窺ふを得べし。試みに、平家物語と太平記とを比較するも、思半に過ぐるものあらん。

徳川時代は、中古に於て涵養せられたる尙武の氣象の最高潮に達せる時期にして、曾我物語・義經記等の勇壯剛毅なるものが喜ばれしも、決して偶然にあらず、さはれ、その根本精神は、國民固有の思想にして、儒教も佛教も、單にこれに形式を與へ

たるに過ぎざるなり。忠孝の精神は、古へよりあり、儒教は、これに名義を與へしなり。佛教が武士の思想を感化する所ありしは、主として禪宗による。座禪の極致は、劍道・柔術の極意と同じきものあるに非ずや。とにかくに、國民本來の特性と外國傳來の思想とは、融和合一して、渾然たる美果を成すに至りしなり。

江戸時代に於ける武士道的思想、此の如く、更に、享保以後に至りては、鬱勃として抑ふべからざる復古主義の興り來れるあり。これ、文學藝術が因襲久しきをなして、極端なる不自然に陥り、虚偽を事として則るべきものなきに慨し、古代の自然に復すべく、唱道せられたる革新の叫に他ならざりしなり。而して、その風潮は、先づ學問に萌し、尋いで、文學・美術・風俗の上

荷田東麿 元文元年歿す、年六十八。
 賀茂眞淵 明和六年歿す、年七十二。
 本居宣長 享和元年歿す、年七十二。
 平田篤胤 天保十四年歿す、年六十八。
 尾形光琳 享保元年歿す、年五十九。
 圓山應舉 寛政七年歿す、年六十三。
 田中訥言 文政六年歿す、年六十五。
 宇喜多一蕙 安政六年歿す、年六十五。
 岡田爲恭 元治元年歿す。
 菊池容齋 明治十一年歿す、九十一歳。

に現はれたり。國學に於ては、荷田東麿、賀茂眞淵、本居宣長の如き、皆古道を闡明してこれを宣揚したるものにして、平田篤胤は、更に一步を進めて、實際社會にそを行はんとせり。畫界にしては、前に生氣淋漓たる尾形光琳出で、後に寫生の妙技を發せる圓山應舉出でしが、復古思想の盛なるに伴ひては、田中訥言、宇喜多一蕙、岡田爲恭等の古土佐を摸するあり、菊池容齋の題材を元弘、建武の頃に採りて、勤王思想を鼓吹せんとするあり。明治維新の鴻業も、期する所、正にこの復古にありしなり。復古成りて、ここに五十餘年、今や、我が國は、東西思想の交會點にあり。

(東圃遺稿に據る)

中山三柳

中山忠義、花陽軒と號す、土佐の人、醫を業とす、後京都醍醐に隱居す。

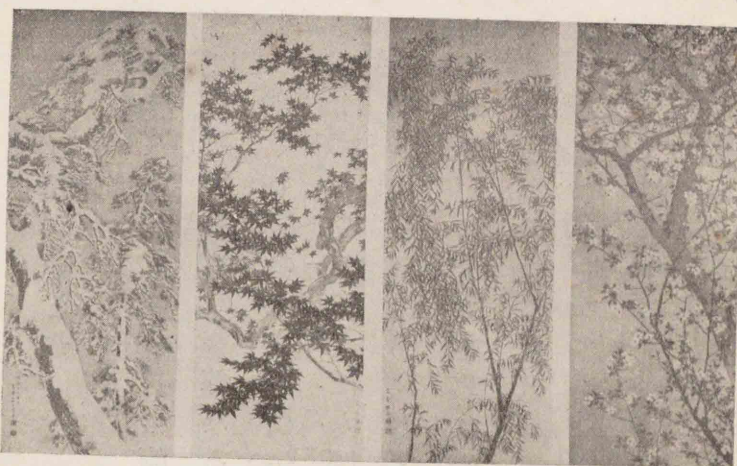
二五 今と昔

中山三柳

春は秋こそよけれ月も朧にてさやかならず白櫻紅梅は富麗にて黄菊紫蘭の寒疎なる身にしむばかり感深きに如かず鶯の鳴くも鹿の遠音には劣りぬなど思ふ冬は夏こそよけれ寒風はげしくて窓だにも開き得ず雪さへ深ければ道ゆくこともものうくなんす。しき池の水に逍遙しそこはかとなくしげれる宿に暑さを忘れ野山ひろげに見わたしぬるには如かずと思ふ又秋になれば春こそめでたきをりなれあかしかねたる長月に蟲の聲さへかしましくて庭も籬も露深ければおり立つもさうざうしのどかなる日は野山ありくも心さへうきたつめり霞にこもる月の色までやはらかにゆたかなり

水曜
十八
二十五

あゆ
あゆめ



(筆 齋 寛 森) 季 四

しかなと思ふ又夏は冬こそ
ゆかしけれ軒ひき家は炎
暑にたへかね暮るれば蚊遣
火の煙だにいぶせく道に出
でぬれば手足もたゆく汗の
みあえて柳かげの清水さへ
たづねかねたるを爐を圍み
茶を煮ておもふどちうちか
たらへば寒風もおぼえず雪
のあけほのはすだれまきあ
げてながめゐたるがをかし
かりしかなとぞ思ふわが國

あらがねの

やすきい

も戦國のところには國々の騒動一歳としてしづかなることな
く西をさまれば東みだれ北しづまれば南さわがしく家居は
やかれて野らとなり妻子はうばはれてゆくへしらず人みな
の足をそらにしてうかれありきはいかばかり苦しきこと
なりけんかゝる世に出であひてさちなく山野の寒暑を凌ぎ
路頭に飢渴を忍ばんに死なでありなばなほかなしからん今
太平の御代に生れてひさかたのあめすなほにあらがねのつ
ちゆたかにして君臣父子の道正しくおそるゝこともなくか
なしむこともなく枕を高うしてやすきいをたのしむらんは
まことにありがたきことならずや人々かくはおもはずやあ
らん。

(醍醐隨筆)

河とほじろし。春の日は山し見が欲し、秋の夜は河
し清けし。朝雲に鶴は亂れ、夕霧に蝦はさわぐ。見
る毎に 哭のみし泣かゆ、いにしへ思へば。

吾欲之野嶋波見世退底深伎阿胡根能
浦乃珠曾不松
わ、わもひのまはみえたのこり

集葉萬本校曆元

子等を思ふ歌

山上憶良

瓜食めば 子ども思ほゆ。栗食めば ましてしぬば
ゆ。いづくより 來りしものぞ、眼交に もとなか
かりて、安寝しなさぬ。

山上憶良
文武天皇の大
寶元年遣唐使
派遣の節その
少録となり、
元明天皇の和
銅七年從五位
下、元正天皇
の靈龜二年伯
耆守となり、
養老五年、退
朝の後東宮に
待す。
天平五年歿、
年七十四。

※作者未詳

反歌

白金も黄金も玉も何せむに、まされる寶子にしかめやも。

※不盡山を詠める歌一首並に短歌

なまよみの 甲斐の國、打ち寄する 駿河の國と、こち
ごちの 國のみ中ゆ、出て立てる 不盡の高嶺は、天雲
も い行き憚り、飛ぶ鳥も 翔びも上らず、燎ゆる火を
雪もて消ち、降る雪を 火もて消ちつゝ、言ひもかね、
名づけも知らに、靈しくも 坐す神かも。石花海と 名
づけてあるも、その山の 包める海ぞ。不盡河と 人の
渡るも、その山の 水のたぎちぞ。日本の やまとの國
の、鎮とも 坐す神かも。寶とも なれる山かも。駿河
なる 不盡の高嶺は、見れど飽かぬかも。

反歌

不盡の嶺に、零り置ける雪は、六月の十五日に消ぬれば、その夜降りけり。
不盡の嶺を、高みかしこみ、天雲も、い行きはばかり、たなびくものを。

和辻哲郎

哲學者、明治二十二年兵庫縣に生る、京都帝國大學助教授。

内生

屯す

二七 人生は戦である

和辻哲郎

人生は戦である。そして戦の大小・深淺が人間の價値を左右する。

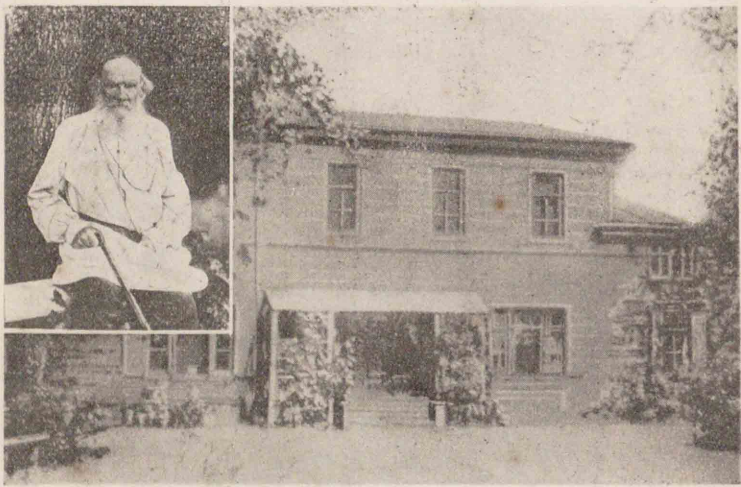
戦の態度の統一は、複雑な内生によるよりも、單純な迷のな
い生活に遙かに起り易い。それ故、ただ純一の故を以て意を
安めてはならぬ。純一の態度に固執する者は、ともすれば、内
容を空疎にする。

私は或冬の日、紺青鮮かな海の邊に立つた。帆を張つた二
三十艘の小舟が、羣をなして沖から歸つて來る、そして鳩が地
へ舞下るやうに、徐々に一艘づつ帆を下して、半町程の沖に屯
した。濱邊との間には、大きい白い磯波が捲返してゐる。何

力のリズム

時の間にか、老人や子供達が濱邊に羣り立つた。やがて、體格の立派な若者の揃つて乗つた舟が、沖合から突進んで來る。磯波は烈しく押返す。磯から綱が投げられる。若者が波の間へ飛込んで行く。舟は木の葉のやうに揉まれてゐる。綱が確實に舟に結びつけられる。若者は舟の傍木へ肩を掛ける。陸からは綱を引くものが、諸聲に力のリズムを響かせる。かくて波を蹴散し、足を揃へ、聲を合せて、舟を砂の上に引きずり上げて行く。

一艘あがるとともに、舟にゐた若者達は、直ぐに綱を取つて海に向つた。次の一艘が磯波に乗りかゝると、ちやうど暴廻る鹿の角に投掛ける様に、若者は舟へ綱を投掛ける。そして他の若者達は躍り掛つて、肩をあてて一氣に舟を引上げる。



ストイットの肖像と邸宅

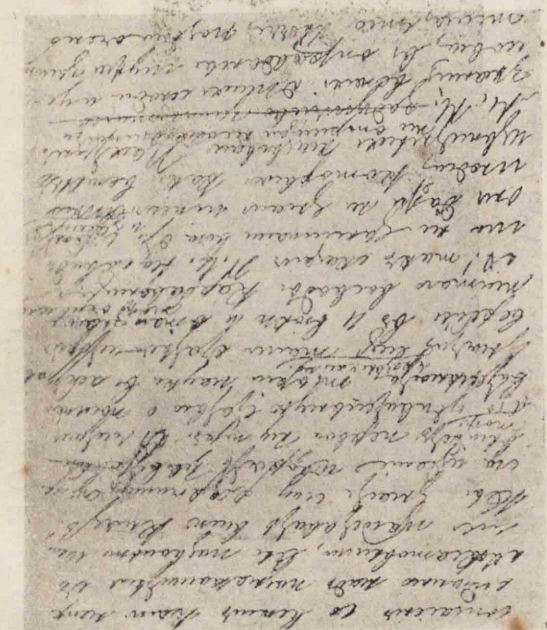
かうして次から次へと數十艘の舟が陸へ上げられるのである。陸上の人数は益殖える。舟は益面白さうに上つて來る。老人や子供や女房達は、綱に掴まつて快活に跳ねてゐる。誰が命令すると云ふでもないのに、一團の人々は、有機體のやうに、協力と分業とで仕事を完全に實現して行く。

私は息を詰めてこの光景を見守つた。海の力と戦ふ人間の姿。集中と純一とが最も具體的な形に現はれてゐる。力の充實際間のない活動。一人の少年が、兩手を高く舉げて波の中に躍り込んで行く。首だけ出して、波にさらはれた板切に追従る。やがて板切を抱いて水を跳飛ばしながら駛上つて来る。生命が躍り跳ねてゐる。生命が自然と戦ひ、それを征服してゐる。私は、そこに現はれた集中と純一と全存在的な活動との故に、暫し恍惚とした。

この氣持の好さは、吾々が凡ての活動に追求して居る所の一種の法悦であつた。吾々の内にも亦、生の焰はかく燃上らなくてはいけない。まことにそれは生本來の姿であり、また生本來の歡喜である。

法悦
生の焰

かうして漁師の羣の活動を眺めてゐる間に、私はふと傍觀者の手持無沙汰を感じ出した。私は漁師の羣に投じて共に



蹟筆イトスルト

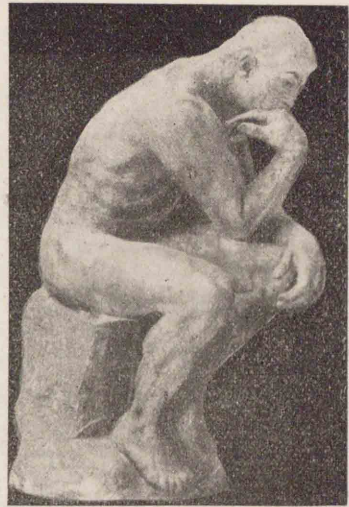
働くか、でなければ、傍觀者としての自己の立場を是認するか、いづれかに道を決めなければならなくなつた。さうして、私の頭には、百姓と共に枯草を刈るトルストイの

面影と、地獄の扉を見下して坐してゐる考へる人の姿とが、相

トルストイ
(Tolstoj)
露西亞の作家、
思想家。
(一八二八一—
九一〇)

考へる人
佛蘭西の彫刻家
ロダン (Rodin)
の作。

竝んで浮び出た。私は石の上に腰をおろし、足を重ねて、左の
肘を右の膝に突いて、顎を手の甲にのせて、そして考へに沈ん
だ。残つた舟は、もう二三艘になつてゐた。



考へる人

私は思つた。漁師の羣
に貴い集中と純一とを認
めたのは、私の心に過ぎな
かつたではないか。彼等
は濱から家へ歸る。そこ
にはもう貴さは見えない。
しかし、敵手が人間になり、
彼等は波と戦つて勇しく打克つ。更
更に自分の心になると、彼等はもう立派な戦士ではない。彼
等の活動は真正の面影を暗示するが、それは彼等自身の全生

活ではなかつた。彼等は低い力と戦つてゐる時にのみ強い
のであつた。

私は複雑な深さの知れぬ人生の色々な力を思つた。そし
て集中と純一との缺けてゐる悲惨な醜さを心に浮べた。そ
こにある苦しい戦は、裸になつて冬の海に飛込むことによつ
ては解決されさうにもなかつた。私はただ自分自身の力で、
自分の内生にあの集中と純一とを獲得する外はない。その
ために私は、あらゆる方面に終局まで戦はなくしてはならぬ。
勝利を得るまでの分裂した生活の惨さは、目下の自分の力で
は如何ともし難い。

私は一つのことを悟り得た。迷と屈託とに遅滞してゐる
の故を以て、直ちにその人の人格を卑しめてはならぬ。態度

の純一の故に、直ちにその人の人格を過大視してはいけない。態度の美しさの外に、なほ一つ、戦の深さによつて人を見る視點があるからである。

(偶像再興)

綱島梁川

倫理學者、宗教的詩人、名は榮一郎。岡山縣高梁町の人。明治四十五年歿、年三十五。

人生夢幻觀

撞着

空華の影を追ふ

事實の聲

福澤諭吉

豊前中津藩の人、慶應義塾大學の創立者、明治三十四年歿、六十八。

二八 勞働と人生

綱島梁川

一

勞働は人生夢幻觀と撞着す。世界と人生との夢幻視せらるゝ所には、何の眞面目なる勞働かあらんや。こゝに働くは夢みるなり、描くなり、行く水に空華の影を追ふなり。勞働の觀念は、嚴に之と相容れず。勞働は眞面目なり、嚴肅なり、直ちに吾人の心魂に響く力の聲なり、事實の聲なり。勞働は、天地人生を莊嚴なる事實と觀ずる根本的豫想の上に榮ゆべき生命の大樹なり、そは勞働なる者が莊嚴なる事實なればなり。人生夢幻觀は、竟に眞面目なる、又偉大なる勞働を産出する國土にあらざるなり。明治の先覺福澤諭吉氏の如きは、天地人

人生は眞面目
なり

(Life is earnest.)
米國の詩人ロ
ングフェロー
の詩の句。

生を夢なり戯なりと観ずる根本の見地に立ちながら、尙この一場の夢や戯を夢や戯と観ぜずして、恰も眞面目らしく働く所に處世の妙趣ありと説きたり。余は曾て之を奇怪なる矛盾觀として斥けたり。人生若し夢幻の戯ならば、労働も亦眞面目なるを得ざるべく、労働若し眞面目のものならば、人生はた夢たり戯たることを得じ。一は嚴密に他と相背馳すべきものなり。福翁の如是人生觀や處生觀は、斷じて誠實なる人心の要求を満足せしむる所以にあらざるなり。それ、生くるはやがて働くなり、労働を離れて人生あらず。労働は人生の眞面目を要求す。聽かずや、鍛鐵工の鎚の一揮一下に「人生は眞面目なり」といふ沈痛の響あるを。労働は事實なり、人生の事實なるが如く事實なり。眞に労働に對して嚴肅なる興味を

有する者は、天地人生を一場の夢幻と觀じ去るを得ざるなり

二

労働は、又、發達といひ進化といふことと至密に抱着す。

吾人は、事物の發達進化を離れて、光輝ある労働の意義を捉ふることに能はず。吾人が働くは單に生きんがためにあらずして、更に一層善き情態に於て生きんがためなり。發達進化の觀念の活潑なる所、手おのづから動き、足おのづから前む。現實は小なり、發達は大きいなり。吾今如何にはかなきものなりとも、日を積み月を累ねて大いに爲すあるべしとの一念現前するや、吾、吾を超越する猛心、空涌し來る。人生、若し何等の發達進化なく、又はたゞ同一事、同情態を反覆するにとゞまることがごときものならば、人は忽ち運轉を氷に喰ひ止められたる

空涌す

※天行健、君子以自
強不息。(易乾卦)
乾德

發達の味

水車のごとくなりぬべし。風吹き雲行く天地の健動ありて、
宇宙に不斷の成長あり。君子は自強して息まず、乾徳日夜に
進動して新となればなり。吾等が人格に事業に、發達進化と
いふ生命の潮の脈うつ不斷の自覺あればこそ、吾等が夕を送
る夢安らかに、朝を迎ふる祈勇ましきを得るなれ。到達や獲
得の喜は、人の常に經驗して知る所、されど同時に又、こゝに到
る徑路、即ち發達そのものにも無類の喜あるは、吾人の經驗す
る所なり。吾人は豊富なる人生經驗の一面として、發達の味
といふことを提唱す。「發達の味」に生くるものは、永久に死を
知らず。而して發達の味は、所詮勞働を離れては存し得ざる
なり。

勞働の味、即ち發達の味にあらずや。勞働が吾人中心の喜

深遠
部分
全部

たり得るは、それが吾人をして、常に現在の「吾より一層、高き吾」に
進ましむるが故にあらずや。思想深遠なる一詩人が、人はた
だ部分に於て在り、併しながら全部に於て在ることを望む。と
歌へりけるは、いみじき眞理なるべし。人の日夜遑々として
働きいそしむは、畢竟此の希望あればなり。貧しき淺蜎賣の
子だに、其の淺蜎籠を擔いで、わが家を立出づる朝な夕の顔
には、今日は昨日より多くの賣代を得べしといふ希望の色の
輝くを見ずや。日に新にして又日に新なりといふ發達進歩
の觀念は、人をして一念の底より奮躍せしむ。偉人は、他が睡
眠を貪る間にも、一息の油斷なく靜かに働きいそしみて、能く
其の大をなすなり。吾人は、今にしてかの歴史的發達の觀念
を闕如せし、若しくは少なくとも之に疎遠なりし古印度人が、

竟に嚴肅なる勞働の興味を有し得ざりしことの當然なるを思ふ。宇宙は成長し、人生は發達す。而して吾人は、勞働によりて以て此の進化の大潮に棹すことを得るにあらずや。勞働を離れてまた進化發達といふものはあらざるなり。

三

「神、光あれと言ひ給ひければ、即ち光ありき。」天地森然之を貫くもの、ただ一箇の働なり。宇宙の開闢史は、此の偉大なる働を以て其の開卷第一の頁を飾られたり。働は天地の歴史の始にして終なり。古聖は曰ひき、「天何をか言ふ、四時行はれ百物生ず。」と、又曰ひき、「吾が父は今に至るまで働き給ふ。」と。吾人が天地に對して、虚心先づ觀じ來るは其の一息不斷の氣化流行なり、即ち働なり。萬物は働によりて常に富み、常に完く、

神、光あれと
舊約聖書創世
記中の語。

天何をか

子曰、天何言

哉、四時行焉、

百物生焉、天

何言哉。(論語)

吾が父は

キリストの語。

萬有

虚無的涅槃觀

アクテイヴィテイ
(Activity) 活
動。

デーティ、ヒカイ
ト (Tithikai) 活動
の樂。

常に充ち満つるなり。働ある、即ち萬有の「在り」と謂はるゝ所以なり。神は即ち働なり、働は即ち神なり。何の働もなき寂靜涅槃といふものは矛盾語なり。寂靜涅槃はやがて働の極、活動の極、充實の極にはあらざるか。斯く觀ぜざる全くの消極的、虚無的涅槃觀は、到底天地の實相を如實に寫したる言葉として、吾人人心と深き交渉を有するに足らざるなり。天地の實相を働と觀じ、活動と觀じて、便ち人則の極は立ち、道義の門は啓かるべし。かるが故に「易」の作者は天行の健動に君子自彊の範を置き、猶太の神人は「天の父は今に至りて尙働き給ふ、われも亦働くなり。」と喝破せり。更に歐洲今代の儒流の大家が、概ね天地實在の本性は、健動即ちアクテイヴィテイ、又デーティヒカイトにありといふ揆一の觀を立て、而してこの觀の

彝倫
田滕

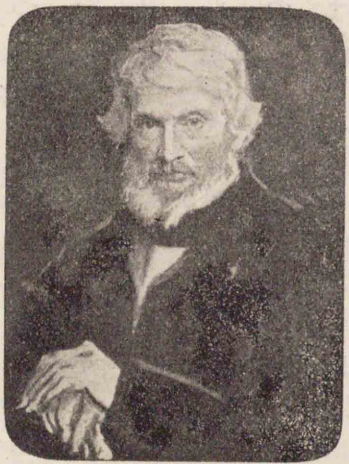
上に徳教彝倫の様々の系統論を布かんとするは人の能く知る所なり。身を田滕の間に起したるわが二宮尊徳が、一挺の鋤を以て幾多の廢田を興し、窮村を濟へる秘訣は、心を密にして天地健動の不息の流行に乗託したるが故なりと謂ふにあらざるや。

四

働くは現在を働くなり、今の一念を働くなり。今の一念を働かざる働といふものあることなし。働とは現在を充たすことにあらずや。過去は追ふべからず、未來は雲霧に墜つ。眞に吾人に對して在りと謂ひ得べきは唯現在ののみ。過去を想ひ未來を測ることも、亦これ現在の働なり。現在を充たす働の中より光輝ある理想も涌き、偉大なる希望も華さくなり。

現在を充たす

貧賤に素して
君子素其位
而行、不願
乎其外。素富
貴、行乎富貴、
素貧賤、行乎
貧賤。素夷狄、
行乎夷狄。素
患難、行乎患
難。君子無入
而不自得焉。
(中庸)



ルイラーカ・スマート

爾の現在を充たせ、現在は爾が全宇宙なり、否、爾自身なり、眞に働くものは最も切實に現在に立ち、現在を充たさんことを希ふ。彼は當面の一事一念に全心魂を打込んで、復其の他を顧みざるなり。彼に取りては、現在が唯一の事實なり。彼は貧賤に素して貧賤を行ひ、富貴に素して富貴を行ひ、病癘に素して病癘を行ひ、健康に素して健康を行ふ。彼に於ては、健康、病癘、富貴、貧賤等は必ずしも關心の事ならず。唯、是等様々なる現在の事件、境遇に處して、自家が全人格の一念を充實せしむること、これ其の唯一の願なり。自己現在の

カーライル
(Carlyle)
英國の思想家。
一七九五—
一八八一年。

念を充實せしむる、これを外にして、また働といふものの真正合理的の形式的解釋はあらざるなり。カーライルが其の謂ふ所の「最も手近き義務」に重大なる意義を附したる、やがておのづから吾人の意と相參するものにあらずや。若し労働の義をかくの如く解せんか、こゝに忽ち二箇の心靈上の貴き賜は與へらるゝなり。第一、吾人は一生の間、如何なる位置・境遇をも通じて一貫の平安を得べし。第二、如何に異なる位置・境遇の人をも通じて、萬人皆平等なる尊嚴の自覺を得べし。吾、昨は貧しくして病み、今日は富みて而して健かなり、されど現在の一念を充たせる「働」の人として、吾は昨も今も同じ平安の態度を持續し來れるにあらずや。彼は天下の廣居に立ち、吾は草茅無聞の人たり、されど現在の一念を充たせる「働」の人とし

天下の廣居
草茅無聞の人

一念に住す

軒輊

て、彼我駢び立つ同じ尊嚴の自覺を有し得るならずや。蕾は蕾の現在の一念を充たし、花は花の現在の一念を充たせり。蕾は蕾の一念に住して開花の想を做さず、花は花の一念に住して結實の想を做さず、其の現在の一念を充たす働に於ては、彼此相軒輊すべき謂はれあらず。思ふに、眞に労働に忠なるものはかくならざるを得ざるなり。彼も此も、同じくこれ天地の働といふ事實なり。

五

労働は神聖なり、人をして、自己の手腕に立つて獨立の生活を営ましむ。それ労働せずして、報酬を得んとするほど、世に奇怪にして不自然なる矛盾はなきが如く、労働して而して報酬を得るほど自然にして順正なる事相はあらざるなり。働

なくして吾等に生存の理由はあらず、吾等は最後の一息まで、何等かの形に於て勞作せざるべからず、勞作せずして報酬を得んとする思想は人類の恥辱なり。そはやがて個人の墮落なり、國家の滅亡なり。我が邦今日に於ける投機的精神の盛なるは最も寒心すべし。吾等は「働かずんば食はず」といふ覺悟に立たざるべからず。この覺悟、この精神ほど、人をして剛毅勇敢ならしむるものあらず。或は働いて尙食を得ずといふものあらんか、思ふにかくの如き人は未だ眞に働かざる者、即ち現在の一念を充實せしむる底の勞作を経験せざるもの、言草たるべし。「自然」の組織は、働くものに衣食を給せざるほど、しかく不自然に、貧寒に、慳吝ならず。如何なる種類の働にもあれ、働にはそれに伴ふ自然の報償あり。織るものは卷

慳吝

き、耕するものは穫る、あるは人に勞を藉して一定の工賃を得る、亦おのづからなる報酬の一種ならずや。凡そ自家が正直なる額に汗し、清き良心もて獲得せる報酬は皆以て天與の報酬と稱すべし。わが清き良心を以て獲たる天與の報酬、げに是こそは公明にして純淨、また一點俗世の薰染を帯びざるなり。此の正直なる勞作と、此の純潔なる報酬と、世にこれほど快美底のものあるべしとも思はれず。「中夜の音楽」とはかかる快美底の實驗を描きたる言葉なるべし。

六

或は、神の恩寵を信ずるものにして尙自力の働を頼むは、驕慢不敬虔の甚だしきものなりと謂はんか。然り、神の無限の恩寵は、吾人の働を以て言ふにも足らぬ無益のものとなすな

り。吾人が區々の働、神の前に何の光かあらんや、神の恩寵は、些かも吾人の働、行業の有無大小如何に繋り存せざるなり。これ、優婉の思想なり、謙虚の態度なり、歸依あつき信仰なり。されど尙一步を深うして考ふれば、神の恩寵そのものと雖も、全く吾人の働の無き所には降るに由なくして、ここには勞働對報酬の原理の沈々として嚴正に行はるゝを見るなり。

夫れ神は世の罪人を憐れみ給ふ。而かも神は彼等を救はんが爲には、其の最愛の獨子をして、十字架上に慘憺たる血液を灑がしめ給ひき、是れ豈神の大いなる働にあらずや。更に吾等十字架を打仰ぐものは、其の大愛に感發し猛然として改悔の新生活に入る、是れ信ずるもの大いなる働にあらずや。かくして、十字架は、畢竟神即ち愛する者の働と、人即ち愛せら

贖罪法

るるものの働と、この二つの働の結び出だしたる心靈の救の道たるなり。誰か十字架を以て、何等の働もなき奇蹟的恩恵の贖罪法と視るものぞ。十字架は神と人との光輝ある働の感應なり。

大悲

縁なき衆生

ポーロ (Paulus; Paul)
キリスト教の
原始時代第一
の神學者、キ
リスト使徒の
一人。
ルーテル
(Luther)
ドイツの宗教
改革家。一四
八三—一五四
六年。

吾人をして恩恵を説くに専らにして、はたらき勞作を閑却せしむること勿れ。念佛一つ唱ふる働もなき者には、如來も其の大悲の手を下し給ふべきよすがなきなり。彼等は所謂縁なき衆生なり。ポーロが功績なくして義とせらる。といふ信仰や、ルーテルが義人は信仰に因りて生く。といふ信仰や、皆これ眞正なる意味に於て、心靈の働と稱すべきものにあらずや。信仰の二字、談は決して容易ならず。信仰は吾人の全人格を根柢より衝き動かす力なり、働なり。形式・儀文の外的なる働は、吾

儀文

人をして神の恩寵に與るを得ざらしむ。而して信仰獨り能く神の恩寵に與るを得しむるは何が故ぞ。信仰は靈魂の偉大なる働そのものなればなり。

七



ルテ

然らば我等が働は報酬の爲なりと謂はんか、非なり。働は充實なるべし、純粹なるべし。

而して、報酬の一念は働の充實性と純粹性とを害ふものにあらざや。吾等は報酬を目的として働くべからず、而も働くうちに報酬はおのづから伴ひに到る。基督が「先づ神の國とその義とを求めよ。然らば生活上の必需はおのづから加へらるべし。」と言へるもの、やがて此

科を盈たす

商量

の意に外ならず。先づ働きて爾が科を盈たせよ、然らば報は自ら來らん。猶快樂を追求せざる無私の活動に、おのづから快樂の隨伴するあるが如し。報酬を求むる一念既に非なりとせば、況して其の打算をや、商量をや。こゝに分配上の正義を説くことなかれ、吾人が高き心靈の威嚴は斷々として、勞働對報酬の數量的打算を非とするなり。報酬畢竟上天の恩寵に外ならざればなり。受くるものは謙遜と感謝とを以てすべし、何の誇るべき所あらんや。報酬の法則は恩寵の法則なり。何が故に報酬は恩寵なるぞといふに、報酬を産み出づる勞働そのものが、竟に又一種の恩寵なるが故なり。而してかく觀じて、吾人は働の意義に對する最高調、最敬虔の一解に達したることをおぼゆ。

働に神祕の消息あり、働はたゞちに感應の波紋を天地の系統に織るなり。働に深奥の意義あり、働はたゞちに世界の進行といふ神の車に油さすなり。働くものは神の事業に分け入るものなり、而して神の事業に分け入るもの、これやがて神意の實行者に外ならず。何故に働くぞ、神意を實現せんが爲なり。如何にすれば神意を實現し得べき、働きて息まざるにあり。されば基督は又曰く、吾が父は今に至るまで働きたまふ、吾も亦働くなり」と。天父の聖旨を實行する外に、吾等が働といふものは、あらず、勞作これ神に事ふる唯一の祭壇なり。勞作は禮拜なりといふ一語、こゝに想ひ合せて何等の力ある語ぞ。耕すもの、織るもの、謠ふもの、考ふるもの、彼等は皆自家分上の天地の祭司ならずや。されば、又働は我等が自力の沙汰

攝理

にあらずして、そこに不可見の神意常に加はれり。神の攝理の手、回向の光は、不斷に吾等が一切の働と偕に在り。神と偕に働く。吾等が世にありて働くは、譬ふれば猶手習子の師匠に手を取られて字を書くが如きか。知ると知らざるとを問はず、吾等は神に手を取られて自家分上の事にいそしみつゝあるなり。天生萬物靈、使之亮天功。天功を亮けしむの語に回向の意義ありと、わが友の言へるは甚だ佳し。吾等天功を亮くるにあらず、天功を亮けさせてもらふなり。吾等自ら働くにあらずして、働かせてもらふなり。天地大化の波に乗託せざる何の働かあらんや、何の事業かあらんや。働をして感謝讚美の聲たらしめよ、働をして天地の大愛に對する報恩報徳の事たらしめよ。神は吾等をして、神の子といふ光榮ある嗣子

天生萬物靈
横井小桶の詩句。

ブリス
 (William Booth)
 救世軍の創立者。英國の人。
 一八二九年十一月十三日。八十三歳。

たらしめんが爲に、其の協働を命じ給ふにあらずや。我等が働は、神よりの回向なり、恩寵なり。ブリス氏も、亦謂ふ所の勞働は、聖靈の指導協力に須つべし。といふ一轉語を下したり。謙遜にして光榮ある此の一箇の自覺、以て吾等が一切の煩悶を解くべく、以て吾等が理想の人格を圓成すべし。而して耶蘇基督は、そが古今獨歩の體現者なり、模範人なり。

(綱島梁川集)

中等國文 卷十



文部省檢定濟

昭和四年三月二日

昭和四年三月二日
 昭和四年二月廿五日
 昭和四年二月廿八日

發賣所

東京市神田區
 今川小路二ノ十一
 振替口座
 東京八八一五番

金港堂書籍株式會社

中等國文

[全十册]

昭和四年臨時定價				定價			
卷一	卷二	卷三	卷四	卷一	卷二	卷三	卷四
卷五	卷六	卷七	卷八	卷五	卷六	卷七	卷八
卷九	卷十			卷九	卷十		
金七拾壹錢	金八拾八錢	金七拾五錢	金七拾五錢	金四拾九錢	金四拾七錢	金四拾五錢	金四拾五錢

代表者 原安三郎

印刷所 新堂

發行兼印刷者 金港堂書籍株式會社

東京市神田區今川小路二丁目十一番地

著作者 藤井乙男



昭和五年臨時定價 金七拾參錢

昭和六年臨時定價 金七拾壹錢

